SD043　断面　（南から）

SD048　断面　（北から）

SD044 ベルト a-a'　断面　（北から）

SD044 ベルト b-b'　断面　（北から）

SD045　断面　（北から）

SK237　遺構内完掘状況　（南から）

SE004　断面　（南から）

SE005　断面　（西から）

図版 26　Ⅸ地区の遺構３（６地点）

b 遺構内出土遺物

近世～近代の遺構内出土遺物について、今報告では地区別にまとめて報告する。

Ⅶ地区

遺構内からは合計 11,376 点の遺物が出土した。主な遺物として、中国・タイ・本土産陶磁器、沖縄産陶器、土器、石器、石製品、銭貨、青銅製品、鉄製品、瓦、ガラス製品等が出土しており、最も多いのは沖縄産陶器である。陶磁器に関しては、近世～近代のものが主体である。ここでは代表的な 125 点について図化し、個々の所見は遺物観察表（第７表）でまとめる。また、全体の遺物出土状況については第 18 表にまとめ、付属の CD-ROM 内に所収した。

第７表　遺構出土遺物観察一覧（Ⅶ地区）a

挿図番号 図版番号		種類	器種	分類	部位	法量(cm) 口径(長軸)	底径(短軸)	器高(厚さ)	観察事項	地区	出土地	区画
第77図 図版27	1	近代 本土産陶器	急須	—	口～底部	11.0	9.4	15.3	外面胴下部まで緑釉を施釉。内面は口縁部下部に白釉を施釉。口縁部は露胎。釉剥ぎ。素地は灰白色で緻密。黒色粒を含む。外面に白色で圏線、波状文、花文等。モルタル質物により把手補修し、紐通し穿孔。	Ⅶ	SD002 埋土	区画 26・27
	2	沖縄産 施釉陶器	碗	—	口～底部	13.2	6.0	6.2	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗付。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は灰色。	Ⅶ	SD002 埋土	区画 26・27
	3	沖縄産 施釉陶器	碗	—	口～底部	13.2	6.0	6.8	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗付。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は淡黄色。外面に呉須と褐釉で花文。	Ⅶ	SD002 埋土	区画 26・27
	4	沖縄産 施釉陶器	碗	—	口～底部	13.8	6.2	6.5	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗付。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は淡黄色。内外面に呉須で菊花文。	Ⅶ	SD002 埋土	区画 26・27
	5	沖縄産 施釉陶器	碗	—	口～底部	13.25	5.3	6.1	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗付。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は橙色。呉須で外面に巴文、内面に菊花文。	Ⅶ	SD002 埋土	区画 26・27
	6	沖縄産 施釉陶器	小碗	—	口～底部	7.0	3.4	4.85	直口口縁。畳付は露胎。素地は淡黄色。外面に呉須で花文。外面口縁部下部と胴下部に圏線。	Ⅶ	SD002 埋土	区画 26・27
	7	白磁	水注	—	胴部	—	—	—	注口部。素地は灰白色で緻密。外面に細かい貫入が見られる。	Ⅶ	SD003 埋土	区画 26・27
	8	白磁	小碗	—	口～底部	8.1	3.4	4.4	型成形。外反口縁。口唇部は釉剥ぎ。畳付及び外底は露胎。素地は白色で緻密。畳付に砂粒が付着。徳化窯産。	Ⅶ	SD003 埋土	区画 26・27
	9	染付	小碗	—	底部	—	3.6	—	内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎。素地は灰白色で緻密。細かい貫入が見られる。福建・広東系。	Ⅶ	SD003 埋土	区画 26・27
	10	沖縄産 施釉陶器	碗	—	口～底部	14.0	6.2	6.8	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。内底は蛇の目状の釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗付。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は灰黄色。外面に呉須と褐釉で花文3つ。	Ⅶ	SD005 埋土	区画29
	11	沖縄産 施釉陶器	瓶	—	底部	—	6.7	—	外面及び内面頸部途中黒釉を施釉。外面高台際から外底まで露胎。素地は淡黄色。	Ⅶ	SD005 埋土	区画29
	12	沖縄産 施釉陶器	瓶	—	底部	—	7.5	—	外面及び内面頸部途中まで白化粧＋透明釉を施釉。畳付にアルミナを塗付。素地は灰白色。外面に呉須と褐釉で蓮文。頸部に2条の沈線と獣形の把手。	Ⅶ	SD005 埋土	区画29
	13	沖縄産 施釉陶器	高足杯	—	口～底部	4.8	2.8	4.55	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。底部は平底で露胎。素地は淡黄色。	Ⅶ	SD005 埋土	区画29
第78図 図版27	14	石器	磨石	—	—	—	—	—	磨石の破片。表面、側面に敲打痕及び磨面。重量47.05g。緑色岩。	Ⅶ	SD005 埋土	区画29
	15	石製品	硯	—	—	—	7.2	1.9	表裏面に線条痕。陸部に凹みあり。裏面左側に「玉那覇〇太」、中央に「赤間関」の刻字。重量358.3g。赤間関産か。	Ⅶ	SD005 埋土	区画29
	16	金属製品	簪	—	—	14.1	—	—	ジュラルミン製。ジーファー。匙状。カブ厚2.0mm、カブ長9.3mm、頭長23.0mm、竿長108.4mm。頭断面は扁平六角形、竿断面は六角形。重量7.47g。	Ⅶ	SD005 埋土	区画29
	17	陶質土器	碗	—	底部	—	8.0	—	素地は灰白色。外面胴部に沈線。内外面ロクロナデ。	Ⅶ	SD012 埋土	区画29

第７表　遺構出土遺物観察一覧（Ⅶ地区）b

挿図番号 図版番号		種類	器種	分類	部位	法量(cm) 口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	観察事項	地区	出土地	区画
第78図 図版28	18	染付	碗	—	口縁部	12.0	—	—	口縁部がわずかに外反する。素地は白色で緻密。外面に文様、内面に圏線。福建産。	Ⅶ	SD013 埋土	区画29
	19	染付	皿	—	口～底部	15.2	7.6	3.0	外反口縁。素地は灰白色で緻密。黒色粒を含む。畳付は露胎。内外面に草花文。徳化窯産。	Ⅶ	SD013 埋土	区画29
	20	東南アジア産 陶器	壺	—	口縁部	15.6	—	—	口縁部は肥厚する。素地は明赤褐色。石英、黒色粒等を含む。	Ⅶ	SD013 埋土	区画29
	21	本土産磁器	鉢	染付	口縁部	9.0	—	—	素地は白色で緻密。外面に櫛文と山水の文様、内面に櫛文。肥前産。	Ⅶ	SD013 埋土	区画29
	22	本土産 近現代磁器	小碗	—	口～底部	7.3	2.8	3.5	素地は灰白色で緻密。内外面に草文。内底に渦巻文。	Ⅶ	SD013 埋土	区画29
	23	沖縄産 施釉陶器	碗	—	口～底部	14.3	6.6	6.9	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗付。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は褐灰色～橙色。	Ⅶ	SD013 埋土	区画29
	24	沖縄産 施釉陶器	小碗	—	口～底部	8.4	3.8	4.1	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗付。素地は明黄褐色。外面面取り。	Ⅶ	SD013 埋土	区画29
	25	沖縄産 施釉陶器	小碗	—	口～底部	8.0	3.4	4.0	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗付。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は灰色。	Ⅶ	SD013 埋土	区画29
	26	沖縄産 施釉陶器	小碗	—	口～底部	7.85	3.8	3.8	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗付。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は灰白色。外面に呉須と褐釉で文様3つ。	Ⅶ	SD013 埋土	区画29
	27	沖縄産 施釉陶器	小杯	—	口～底部	4.9	2.1	2.2	内外面に透明釉施釉。外面胴部下半から外底にかけて露胎。素地は灰白色。	Ⅶ	SD013 埋土	区画29
	28	沖縄産 施釉陶器	鉢	—	口～底部	22.4	9.4	8.1	外面に黒釉＋青白色の釉、内面に白化粧＋透明釉を掛け分け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗付。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は黄橙色。	Ⅶ	SD013 埋土	区画29
	29	沖縄産 施釉陶器	壺	—	口～底部	5.55	6.9	12.9	内外面に黒釉を単掛け。口縁部は釉剥ぎ。外面胴部下半から外底にかけて露胎。素地は黄橙色。	Ⅶ	SD013 埋土	区画29
	30	沖縄産 無釉陶器	鉢	—	口縁部	38.6	—	—	口縁部は逆「L」字状を呈する。素地は明赤褐色。内面は轆轤痕が明瞭。口唇部上面に沈線。	Ⅶ	SD013 埋土	区画29
	31	沖縄産 無釉陶器	擂鉢	—	口～底部	29.2	12.2	12.3	口縁部は逆「L」字状を呈する。素地は赤褐色。内面に櫛目を施す。口唇部上面に沈線。	Ⅶ	SD013 埋土	区画29
	32	沖縄産 無釉陶器	壺	—	口縁部	11.7	—	—	口縁部は逆「L」字状を呈する。素地は明赤褐色。内外面ともに轆轤痕が明瞭。	Ⅶ	SD013 埋土	区画29
	33	石製品	石盤	—	—	6.6	4.7	0.4	表裏面に線条痕。重量22.23g。粘板岩。	Ⅶ	SD013 埋土	区画29
第79図 図版28	34	染付	碗	—	口縁部	—	—	—	直口口縁。素地は白色で緻密。黒色粒を含む。外面に花文。福建・広東系。	Ⅶ	SD014 埋土	区画 29・30
	35	円盤状製品	—	—	—	5.35	5.15	0.95	素材は沖縄産無釉陶器。重量37.64g。	Ⅶ	SD014 埋土	区画 29・30
	36	沖縄産 施釉陶器	小碗	—	口～底部	7.9	3.8	5.1	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。畳付にアルミナを塗付。素地は灰白色。内底に砂粒が付着。外面面取り。	Ⅶ	SD015 埋土	区画 29・30
	37	陶質土器	蓋	—	—	—	—	—	素地は橙色。混入物に赤色粒を多く含む。	Ⅶ	SD015 埋土	区画 29・30
第79図 図版29	38	染付	皿	—	口縁部	—	—	—	素地は白色で緻密。内面に文様あり。景徳鎮産。	Ⅶ	SD017 埋土	区画 27・30
	39	沖縄産 無釉陶器	壺	—	口縁部	15.2	—	—	口縁部は逆「L」字状。素地は暗赤褐色。	Ⅶ	SD017 埋土	区画 27・30
	40	本土産陶器	火鉢	—	口縁部	—	—	—	外面及び内面胴上部は施釉。内面口縁部は露胎。素地は淡黄色で細かい。	Ⅶ	SD019 埋土	区画 27・30
	41	沖縄産 施釉陶器	酒器	—	口縁部	5.0	—	—	内外面に白化粧＋透明釉。素地は淡黄色。一部外面口縁部に褐釉が掛かる。	Ⅶ	SD019 埋土	区画 27・30
	42	沖縄産 施釉陶器	酒器	—	底部	—	6.65	—	外面に呉須と褐釉による文様。畳付は釉剥ぎ。内面は露胎。素地は淡黄色。	Ⅶ	SD019 埋土	区画 27・30
	43	沖縄産 施釉陶器	瓶	—	口～底部	7.3	7.6	16.8	外面及び外底に白化粧＋透明釉、内面に灰釉。畳付は露胎。素地は淡黄色。外面に呉須で文様。頸部に縦耳が剥がれた痕跡が2か所みられる。	Ⅶ	SD019 埋土	区画 27・30
	44	円盤状製品	—	—	—	7.5	7.0	1.1	素材は沖縄産施釉陶器。重量87.26g。	Ⅶ	SD019 埋土	区画 27・30
	45	煙管	—	—	雁首	9.1	—	—	青銅製。火皿径0.9cm。鍛造で側面に接合部。重量7.14g。	Ⅶ	SD019 埋土	区画 27・30

第７表　遺構出土遺物観察一覧（Ⅶ地区）c

挿図番号 図版番号		種類	器種	分類	部位	法量(cm) 口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	観察事項	地区	出土地	区画
第79図 図版29	46	染付	碗	—	口縁部	12.6	—	—	外反口縁。素地は灰白色で緻密。黒色粒を含む。外面に草花文、内面に圏線。徳化窯産。	Ⅶ	SD020 埋土	区画 28・31
	47	染付	碗	—	底部	—	7.1	—	素地は灰白色で緻密。黒色粒を含む。外面に蓮弁文、内面に圏線。徳化窯産。	Ⅶ	SD020 埋土	区画 28・31
	48	色絵	碗	—	口縁部	12.8	—	—	外反口縁。素地は灰白色で緻密。外面に文様あり。	Ⅶ	SD020 埋土	区画 28・31
	49	染付	皿	色絵	底部	—	13.2	—	素地は白色で緻密。外面に唐草文、内面に文様あり。	Ⅶ	SD020 埋土	区画 28・31
	50	本土産磁器	碗	染付	底部	—	4.9	—	素地は灰白色で緻密。黒色粒を含む。畳付は露胎。外面に花弁文。肥前産。	Ⅶ	SD020 埋土	区画 28・31
第80図 図版29	51	沖縄産 施釉陶器	碗	—	口～底部	13.8	6.8	6.45	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗付。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は黄橙色。外面に呉須で巴文。	Ⅶ	SD020 埋土	区画 28・31
	52	沖縄産 施釉陶器	急須	—	底部	—	10.4	—	内外面に黒釉を単掛け。外面胴部下半から畳付は露胎。素地は黄橙色。	Ⅶ	SD020 埋土	区画 28・31
	53	沖縄産 無釉陶器	袋物	—	底部	—	7.1	—	素地は橙色～明赤褐色。内面轆轤痕明瞭。	Ⅶ	SD020 埋土	区画 28・31
	54	石製品	硯	—	—	11.85	6.25	1.55		Ⅶ	SD020 埋土	区画 28・31
	55	円盤状製品	—	—	—	7.6	7.55	0.85	素材は沖縄産施釉陶器。重量93.24g。	Ⅶ	SD020 埋土	区画 28・31
	56	円盤状製品	—	—	—	7.4	7.2	1.0	素材は沖縄産施釉陶器。重量78.80g。	Ⅶ	SD020 埋土	区画 28・31
	57	煙管	—	—	雁首	4.6	—	—	青銅製。火皿欠損。小口径0.9cm。重量8.3g。	Ⅶ	SD020 埋土	区画 28・31
	58	染付	碗	—	口縁部	—	—	—	外反口縁。素地は白色で緻密。外面に唐草文、内面口縁部に圏線。徳化窯産。	Ⅶ	SD020・047 SX043 1層	区画 28・31
第80図 図版30	59	煙管	—	—	雁首	2.8	—	—	瓦質製品で柱状形。火皿径2.0～2.2cm、火皿内径1.6cm、小口径0.7～0.8cm。重量22.55g。	Ⅶ	SD045・020・ 047 3層	区画 28・31
	60	煙管	—	—	雁首	3.3	—	—	青銅製。火皿欠損。小口径1.0～1.1cm。重量5.01g。内部に羅宇残存。	Ⅶ	SD045・020・ 047 14層	区画 28・31
	61	染付	碗	—	口縁部	—	—	—	外反口縁。素地は白色で緻密。外面に文様あり。徳化窯産。	Ⅶ	SD021 埋土	区画31
	62	色絵	皿	—	口縁部	—	—	—	外反口縁。素地は灰白色で緻密。内面に文様あり。福建産。	Ⅶ	SD021 埋土	区画31
	63	陶質土器	蓋	—	—	—	—	—	素地は浅黄橙色。混入物に微砂粒を多く含む。	Ⅶ	SD021 埋土	区画31
	64	円盤状製品	—	—	—	4.8	4.6	1.5	素材は沖縄産無釉陶器。重量39.0g。	Ⅶ	SD021 埋土	区画31
	65	白磁	碗	—	口縁部	—	—	—	玉縁口縁。素地は灰白色で緻密。	Ⅶ	SD027 埋土	区画26
	66	沖縄産 施釉陶器	蓋	—	—	—	—	—	外面胴部及び内面に灰釉を施釉。外面撮みから露胎。素地は灰白色。	Ⅶ	SD027 埋土	区画26
	67	沖縄産 施釉陶器	蓋	—	—	5.8	12.8	4.6	内外面に褐釉を施釉。内外面ともに胴下部から露胎。素地は浅黄橙色。	Ⅶ	SD027 埋土	区画26
	68	白磁	人形	—	—	—	4.2	—	人物立像で上半部は欠損。前後型合わせで中空。側面に接合痕。素地は白色で緻密。外面に透明釉施釉し外底及び内面は露胎。底面に差し込み孔2つ。小孔径1.8mm、大孔径3.1mm。重量40.92g。徳化窯産。	Ⅶ	SD029 埋土	区画27
	69	円盤状製品	—	—	—	6.35	6.4	1.3	素材は沖縄産無釉陶器。重量78.74g。	Ⅶ	SD029 埋土	区画27
第81図 図版30	70	土器	鍋	グスク 石鍋模倣	把手	—	—	—	縦耳部分。胎土は明黄褐色で泥質。混入物に滑石、砂粒、黒色粒等を含む。	Ⅶ	SD034 埋土	区画 24・26
	71	白磁	碗	—	口縁部	—	—	—	玉縁口縁。素地は灰白色で緻密。	Ⅶ	SD035 埋土	区画26
	72	土器	鍋	グスク	口縁部	—	—	—	口唇部で若干肥厚する。胎土は灰褐色で泥質。混入物に砂粒、黒色粒を含む。	Ⅶ	SD035 埋土	区画26
	73	土器	深鉢	縄文	口縁部	—	—	—	肥厚口縁。胎土は橙色～明黄褐色で砂質。混入物に砂粒、黒色粒等を含む。	Ⅶ	SD036 埋土	区画26

第７表　遺構出土遺物観察一覧（Ⅶ地区）d

挿図番号 図版番号		種類	器種	分類	部位	法量(cm) 口径(長軸)	底径(短軸)	器高(厚さ)	観察事項	地区	出土地	区画
第81図 図版30	74	土器	深鉢	縄文	口縁部	—	—	—	山形口縁。胎土はにぶい黄褐色～褐灰色で砂質。混入物に砂粒、赤色粒等を多量に含む。	Ⅶ	SD036 1層	区画26
	75	白磁	小碗	—	底部	—	3.8	—	素地は白色で緻密。畳付に砂粒が付着。徳化窯産。	Ⅶ	SD045 埋土	区画 28・31
	76	陶質土器	火炉	—	口縁部	14.9	—	—	素地は橙色。内外面ロクロナデ。口縁内に突起。外面把手貼り付け。内面に煤が付着。	Ⅶ	SD045 埋土	区画 28・31
	77	陶質土器	火炉	—	口縁部	14.6	—	—	口縁「L」字状に内湾。素地は橙色。内外面ロクロナデ。把手貼り付け。	Ⅶ	SD045 埋土	区画 28・31
	78	染付	碗	—	口縁部	—	—	—	素地は灰白色で緻密。外面に文様あり。徳化窯産。	Ⅶ	SD048 埋土	区画31
	79	白磁	碗	—	口縁部	—	—	—	玉縁口縁。素地は灰白色で緻密。	Ⅶ	SD049 埋土	区画31
	80	石器	石斧	—	—	9.3	4.6	2.55	全面研磨。表面に敲打痕。刃部刃こぼれ。重量168.41g。輝緑岩。	Ⅶ	SD049 埋土	区画31
	81	石器	磨石	—	—	9.7	6.25	5.05	全面に磨面、側面に敲打痕。重量500.98g。緑色岩。	Ⅶ	SD050 埋土	—
第82図 図版30	82	陶質土器	蓋	—	—	7.4	—	—	素地は灰白色～褐灰色。	Ⅶ	SD052 埋土	—
	83	カムィヤキ	壺	—	口縁部	—	—	—	胎土は赤褐色。ナデ調整が施される。	Ⅶ	SD052 埋土	—
	84	染付	碗	—	口～底部	15.6	8.3	6.84	畳付は露胎。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。素地は白色で緻密。黒色粒を含む。徳化窯産。	Ⅶ	SD055 埋土	—
	85	沖縄産 無釉陶器	鉢	—	口縁部	—	—	—	素地はにぶい赤褐色。赤色粒を含む。外面に沈線の波状文。	Ⅶ	SD055 埋土	—
第82図 図版31	86	白磁	碗	—	底部	—	4.4	—	素地は白色で緻密。畳付と外底に砂粒が付着。	Ⅶ	SD056 1層	—
	87	沖縄産 施釉陶器	皿	—	口～底部	9.25	3.7	2.45	内面に白化粧＋透明釉、口縁部に灰釉を掛け分け。外面は露胎。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は灰白色。	Ⅶ	SD056 埋土	—
	88	沖縄産 施釉陶器	鉢	—	口～底部	25.6	11.6	10.2	内面に白化粧＋透明釉、外面に黒釉を掛け分け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。内底に目跡あり(アルミナ付着)。畳付にアルミナを塗布。素地は浅黄橙色。	Ⅶ	SD056 埋土	—
	89	沖縄産 施釉陶器	小壺	—	口縁部	2.1	—	—	内外面に黒釉を単掛け。素地は浅黄橙色。	Ⅶ	SD056 床面	—
	90	陶質土器	火炉	—	口縁部	15.2	—	—	素地は橙色。内外面ロクロナデ。内面に煤が付着。	Ⅶ	SD056 埋土	—
	91	沖縄産 施釉陶器	碗	—	口～底部	14.5	6.1	6.4	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は明黄褐色。。外面に呉須で文様あり。	Ⅶ	SD058 埋土	—
	92	白磁	碗	—	底部	—	6.25	—	畳付は露胎。素地は灰白色で緻密。黒色粒を含む。	Ⅶ	SD060 埋土	区画32
	93	沖縄産 無釉陶器	擂鉢	—	口縁部	27.3	—	—	くの字状口縁。素地はにぶい赤褐色。内面に櫛目を施す。	Ⅶ	SD060 埋土	区画32
	94	染付	碗	—	口縁部	—	—	—	外反口縁。素地は白色で緻密。黒色粒を含む。外面に文様、内面に圏線あり。徳化窯産。	Ⅶ	SD061 床面	区画32
	95	本土産 近代陶器	瓶	—	口～底部	4.25	8.8	20.7	口縁部逆「L」字状で注口がつく。インク瓶。外底は露胎。素地はにぶい赤褐色で釉から。	Ⅶ	SD061 埋土	区画32
	96	染付	皿	—	底部	—	6.2	—	素地は白色で緻密。外底に圏線。内底に草花文か。景徳鎮産。	Ⅶ	SD064 埋土	区画32
	97	煙管	—	—	吸口	2.9	—	—	沖縄産施釉陶器製。小口径1.5cm、口付径0.7cm。外面及び口付内面に瑠璃釉を施釉。小口は平坦。素地は灰白色。重量5g。	Ⅶ	SD069 埋土	—
第83図 図版31	98	沖縄産 無釉陶器	鉢	—	口～底部	25.9	10.0	13.0	素地は橙色。外面口縁部下部に波状文。	Ⅶ	SK024 埋土	区画31
	99	沖縄産 無釉陶器	鉢	—	口～底部	28.5	14.0	15.55	素地は暗赤褐色。外面口縁部下部に沈線＋波状文。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
第83図 図版32	100	沖縄産 無釉陶器	壺	—	口～底部	11.85	15.8	46.15	素地は暗赤褐色。外面頸部下部及び胴上部に沈線。肩部に「＼∵」の線刻。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	101	石製品	印部石	—	—	62.3	33.1	11.65	「け」「いしきや原」の刻字。重量38.6kg。砂岩。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
第84図 図版32	102	石器	石斧	—	—	—	—	—	全面に研磨面。刃部欠損。重量177.98g。緑色岩。	Ⅶ	SK064 埋土	区画26

第７表　遺構出土遺物観察一覧（Ⅶ地区）e

挿図番号 図版番号		種類	器種	分類	部位	法量(cm) 口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	観察事項	地区	出土地	区画
第84図 図版32	103	石製品	砥石	—	—	5.9	5.85	4.1	半分欠損。表裏下面に砥面。孔径2.0cm。重量156.46g。石灰岩。	Ⅶ	SK064 埋土	区画26
	104	石器	石斧	—	—	3.65	2.85	1.0	小型石斧で刃部片。重量14.09g。緑色粘板岩。	Ⅶ	SK172 埋土	—
	105	陶質土器	火炉	—	口縁部	14.2	—	—	素地は橙色。内外面ロクロナデ。内面に煤が付着。内面に線刻あり。	Ⅶ	SK110 埋土	区画28
第84図 図版33	106	沖縄産 施釉陶器	酒器	—	底部	—	6.7	—	外面及び内面頸部に白化粧＋透明釉を単掛け。外面胴部に稜を持つ。畳付から外底及び内面は露胎。素地は淡黄色。外面に呉須と褐釉で花文4つ。	Ⅶ	SK121 1層	区画28
	107	沖縄産 施釉陶器	小壺	—	底部	—	2.7	—	外面に黒釉を単掛け。外底及び内面は露胎。素地は灰白色。外面胴下部から外底にかけて砂粒が付着。	Ⅶ	SK121 1層	区画28
	108	瓦質土器	蓋	—	—	10.6	—	—	素地は褐灰色。混入物に微砂粒を含む。	Ⅶ	SK149 埋土	—
	109	煙管	—	—	雁首	—	—	—	沖縄産施釉陶器製。小口径1.4cm、小口内径0.95cm。外面に緑釉を施釉。火皿欠損。素地は白色。重量2.4g。	Ⅶ	SK155 埋土	—
	110	染付	碗	—	口縁部	13.0	—	—	外反口縁。素地は灰白色で緻密。外面に草花文、内面に圏線。徳化窯産。	Ⅶ	SK206 埋土	区画28
	111	陶質土器	火炉	—	底部	—	9.3	—	素地は橙色。内外面ロクロナデ。外面に白色で圏線あり。外面に把手を持つ。	Ⅶ	SK206 埋土	区画28
	112	本土産磁器	小碗	—	底部	—	4.2	—	外面は緑灰色の釉薬、外底及び内面は透明釉を施釉。畳付は釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外底に銘あり。肥前産。	Ⅶ	SK238 埋土	—
	113	円盤状製品	—	—	—	3.6	3.4	0.95	素材は沖縄産無釉陶器。重量16.31g。	Ⅶ	SP080 埋土	区画27
	114	染付	鉢	—	口縁部	—	—	—	外反口縁。素地は白色で緻密。黒色粒を含む。内外面に文様あり。福建・広東系。	Ⅶ	SP445 埋土	区画28
	115	染付	碗	—	口縁部	15.7	—	—	素地は灰色～灰白色で緻密。外面に唐草文、内面に圏線。徳化窯産。	Ⅶ	SL002 埋土	区画29
	116	染付	碗	—	口縁部	—	—	—	素地は灰白色で緻密。外面に文様あり。徳化窯産。	Ⅶ	SL002 1層	区画29
	117	土器	深鉢	縄文	口縁部	—	—	—	肥厚口縁部。外面に沈線で階段状文様。胎土は褐灰色で泥質、混入物に砂粒、黒色粒等を含む。器面はアバタ状を呈する。	Ⅶ	SX005 埋土	区画29
第85図 図版33	118	沖縄産 無釉陶器	壺	—	口～底部	10.3	13.8	36.7	素地ははにぶい赤褐色。外面頸部下部及び胴上部に沈線。胴部に漆喰が付着する。	Ⅶ	SX020 埋土	区画30
	119	貝製品	蓋	—	—	—	—	—	118の蓋として使用。重量106.63g。サラサバテイ。	Ⅶ	SX020 埋土	区画30
	120	沖縄産 無釉陶器	壺	—	底部	—	17.55	—	口縁部欠損。素地は暗赤褐色。外面胴上部に沈線。	Ⅶ	SX020 埋土	区画30
第85図 図版34	121	沖縄産 無釉陶器	壺	—	口～底部	15.7	17.7	47.1	口縁部が逆「L」字状を呈する。素地は暗赤褐色。外面口縁部下部に沈線。外面胴上部に「さ」の字状の線刻あり。	Ⅶ	SX020 埋土	区画30
	122	沖縄産 施釉陶器	碗	—	口～底部	14.0	6.2	6.3	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗付。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は灰白色。	Ⅶ	SX030 埋土	区画26
	123	沖縄産 無釉陶器	皿	—	口～底部	9.6	3.7	2.75	外反口縁。素地は暗赤褐色。	Ⅶ	SX030 埋土	区画26
	124	沖縄産 無釉陶器	擂鉢	—	口～底部	28.4	11.8	12.4	口唇部逆「L」字状。素地は明赤褐色。内面に櫛目を施す。	Ⅶ	SX030 埋土	区画26
	125	沖縄産 無釉陶器	壺	—	底部	—	6.9	—	素地は橙色。内外面ともに轆轤痕が明瞭。	Ⅶ	SX030 埋土	区画26
図版34	126	本土産磁器	碗	色絵	口縁部	—	—	—	素地は白色で緻密。外面に花文、樹木文、鳥文。内面に文様あり。	Ⅶ	SD002 埋土	区画 26・27
	127	本土産 近現代磁器	小碗	—	口～底部	8.8	3.3	4.5	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に梅文。	Ⅶ	SD005 埋土	区画29
	128	円盤状製品	—	未製品	—	5.2	4.6	0.6	素材は沖縄産施釉陶器。重量29.99g。	Ⅶ	SD005 埋土	区画29
	129	ガラス製品	瓶	—	口～底部	1.5	1.6	6.4	形状は円柱状を呈する。側面に「ヘルプ」、「定價金貳拾銭」のエンボス。色調は透明。気泡がみられる。	Ⅶ	SD005 埋土	区画29
	130	ガラス製品	瓶	—	口～底部	2.3	3.0	5.5	底形は円形。色調は透明。気泡がみられる。	Ⅶ	SD005 埋土	区画29
	131	ガラス製品	瓶	—	口～底部	1.7	長 4.8 短 3.3	11.35	底形は楕円形。側面に「LAITFOOD」、「レートフード」、瓶底に「レート」と星形のエンボス。色調は透明。わずかに気泡がみられる。	Ⅶ	SD005 埋土	区画29

第７表　遺構出土遺物観察一覧（Ⅶ地区）f

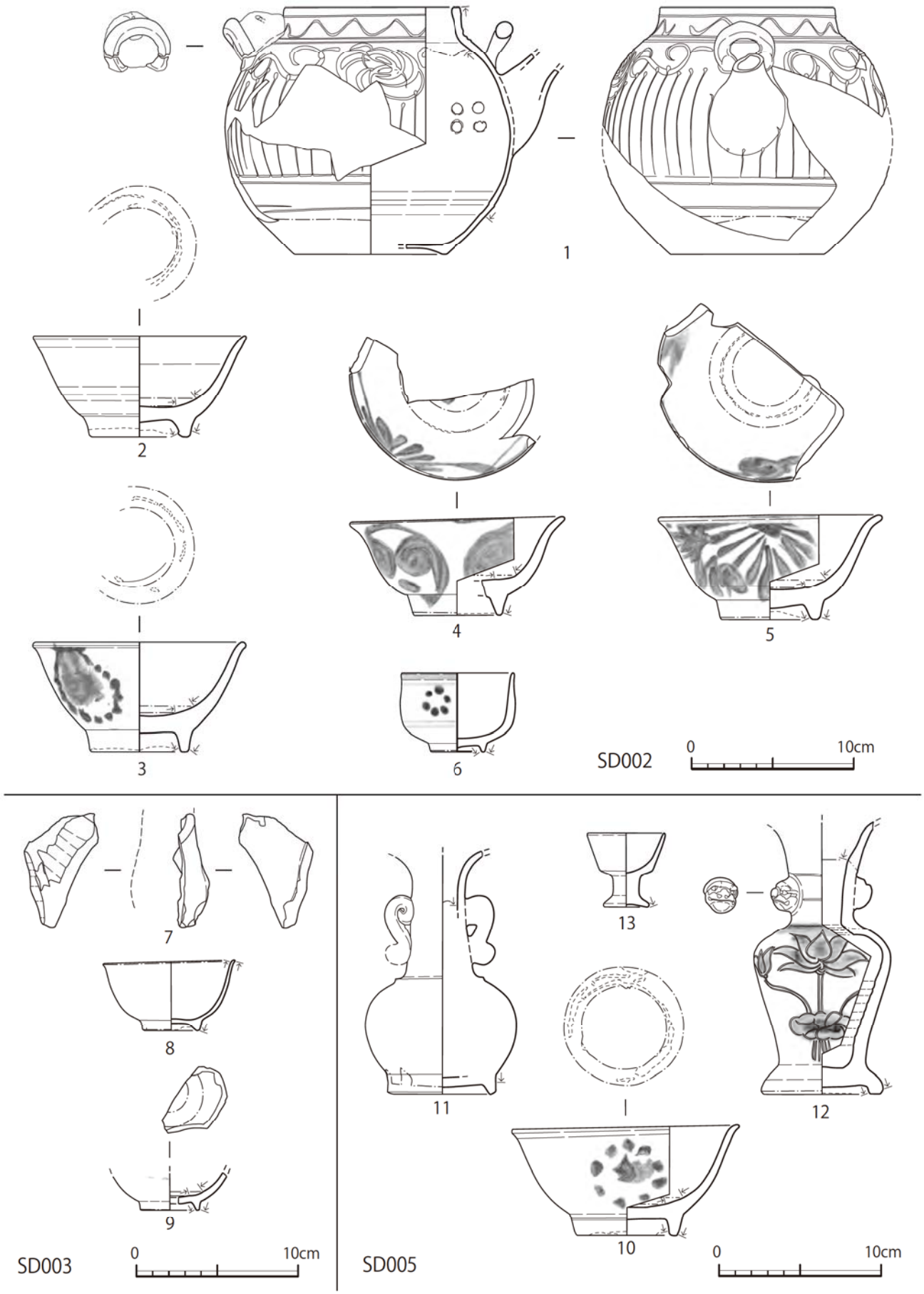
挿図番号 図版番号		種類	器種	分類	部位	法量(cm) 口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	観察事項	地区	出土地	区画
図版34	132	本土産 近現代磁器	小碗	—	口～底部	9.8	3.8	5.3	畳付は露胎。素地は白色で細かい。型紙絵付け。	Ⅶ	SD013 埋土	区画29
図版35	133	本土産 近現代陶器	急須	—	口～底部	7.0	5.7	6.9	素地は灰色。把手に花形5孔の模様。外底に布目がみられる。造りが非常に薄い。	Ⅶ	SD013 埋土	区画29
	134	本土産 近現代磁器	蓋	—	—	12.4	—	2.3	クロム青磁。内面は透明釉を施釉。素地は白色で緻密。上面に型造りの草花文を貼り付け。	Ⅶ	SD013 埋土	区画29
	135	沖縄産 施釉陶器	急須	—	口～底部	8.1	8.6	11.4	外面及び内面口縁部に白化粧＋透明釉を単掛け。外面胴部下半から外底は露胎内面口縁部下から内底にかけて白化粧を施す。素地は灰白色。	Ⅶ	SD013 埋土	区画29
	136	沖縄産 施釉陶器	袋物	—	底部	—	6.1	—	内面及び外面胴部下部から外底にかけて露胎。素地は灰白色。	Ⅶ	SD015 埋土	区画 29・30
	137	本土産磁器	袋物	染付	口縁部	—	—	—	素地は白色で緻密。内外面に撫文。肥前産。	Ⅶ	SD019 埋土	区画 27・30
	138	石製品	炉？	—	口～底部	長 37.25 短 33.0	長 24.9 短 22.8	14.55	縁周辺は赤く変色する。内面は凹形を呈し、黒ずんでいる。底部は中央部がやや凹み、四隅は四足を意識してか、やや突起状に成形。鉄が内面に付着。重量21.0kg。砂岩。	Ⅶ	SD019 埋土	区画 27・30
	139	金属製品	簪	—	—	11.7	—	—	アルミ製。ジーファー。カブは破損。頭長27.3mm、竿長87.7mm。頭断面、竿断面ともに六角形。竿断面は角に丸みを帯びる。重量3.9g。	Ⅶ	SD019 埋土	区画 27・30
	140	ガラス製品	瓶	—	口～底部	1.3	1.95	4.9	底形は円形。色調は透明。気泡が多くみられる。	Ⅶ	SD020・047 SX043 8層	区画 28・31
	141	本土産 近現代磁器	碗	—	口～底部	13.65	3.6	6.25	畳付は露胎。素地は白色で細かい。外底に〇内に「ト」下に「2」、銘あり。型紙絵付け。砥部産。	Ⅶ	SD021 埋土	区画31
	142	ガラス製品	瓶	—	口～底部	3.2	2.6	4.65	底形は円形。外面に「♡」、外底に「ラブミー」のエンボス。色調は白色。化粧瓶か。	Ⅶ	SD029 埋土	区画27
	143	ガラス製品	瓶	—	口～底部	1.9	1.9	—	底形は方形。色調は半透明の茶色。外底に何かのマークらしきエンボスがみられる。金属製の蓋が付着する。	Ⅶ	SD034 埋土	区画 24・26
	144	本土産 近現代磁器	小皿	—	口～底部	8.2	4.45	1.85	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に魚文。銅版転写。	Ⅶ	SD041 埋土	—
	145	石製品	硯	—	—	—	—	2.1	陸部か。側面に線条痕。重量112.9g。粘板岩。	Ⅶ	SD047 埋土	区画31
	146	石製品	硯	—	—	—	—	0.6	裏面に線条痕。重量13.2g。粘板岩。	Ⅶ	SD047 埋土	区画31
	147	鉄製品	ヘラ	—	—	—	—	0.4	刃部。重量448.48g。	Ⅶ	SD047 埋土	区画31
	148	ガラス製品	瓶	—	口～底部	1.75	長 2.5 短 1.6	7.1	外底に「味の素」のエンボス。色調は透明。わずかに気泡がみられる。	Ⅶ	SD047 埋土	区画31
	149	ガラス製品	瓶	—	口～底部	1.75	長 6.0 短 3.9	14.75	外面胴部に目盛が付く。底形は楕円形。色調は透明。気泡がみられる。	Ⅶ	SD047 埋土	区画31
図版36	150	沖縄産 施釉陶器	小碗	—	口縁部	—	—	—	外面に黒釉、内面に白化粧＋透明釉を掛け分け。素地は灰白色。外面に別個体の口縁部が溶着。	Ⅶ	SD058 埋土	—
	151	青銅製品	簪	—	—	9.7	—	—	側差。耳かき状。大きく曲がり変形する。カブ厚1.2mm。カブ長9.8mm、頭長24.3mm、竿長54.0mm。重量2.4g。	Ⅶ	SD064 埋土	区画32
	152	沖縄産 無釉陶器	蓋	—	—	14.1	—	6.1	手づくねによる摘みを持つ。器面に成形時の指頭痕。素地は橙色。混入物に2cm大礫が含まれる。底面に用途不明の小孔あり。小孔径10.3mm。	Ⅶ	SD072 埋土	—
	153	鉄製品	鉄鍋	—	口～底部	—	—	0.25	シンメーナービー。重量7.2kg。	Ⅶ	SD072 埋土	—
	154	ガラス製品	瓶	—	口～底部	2.5	9.3	39.7	外面胴部下部に「NODASHOYU Co Ltd.」、「TRADE□MARK」、外底に「10□11」のエンボス。色調は半透明の水色。	Ⅶ	SK018 埋土	区画27
	155	ガラス製品	瓶	—	口～底部	2.6	9.3	39.85	外面胴部下部に「NODASHOYU Co Ltd.」、「TRADE□MARK」、外底に「7□40」のエンボス。色調は半透明の水色。	Ⅶ	SK018 埋土	区画27
	156	ガラス製品	瓶	—	口～底部	2.6	9.3	39.3	外面胴部下半に「AK」のエンボス。色調は半透明の茶色。	Ⅶ	SK018 埋土	区画27
	157	本土産 近現代磁器	碗	—	口～底部	13.4	4.95	6.1	畳付は露胎。素地は白色で細かい。内底に5つの胎土目。型紙絵付け。	Ⅶ	SK018 埋土	区画27
	158	本土産 近現代磁器	皿	—	口～底部	12.65	7.3	2.5	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に花文。銅版転写。	Ⅶ	SK018 埋土	区画27
	159	本土産 近現代磁器	皿	—	口～底部	12.8	7.3	2.55	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に花文。銅版転写。	Ⅶ	SK018 埋土	区画27
	160	本土産 近現代磁器	皿	—	口～底部	12.8	7.35	2.4	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に花文。銅版転写。	Ⅶ	SK018 埋土	区画27

第７表　遺構出土遺物観察一覧（Ⅶ地区）g

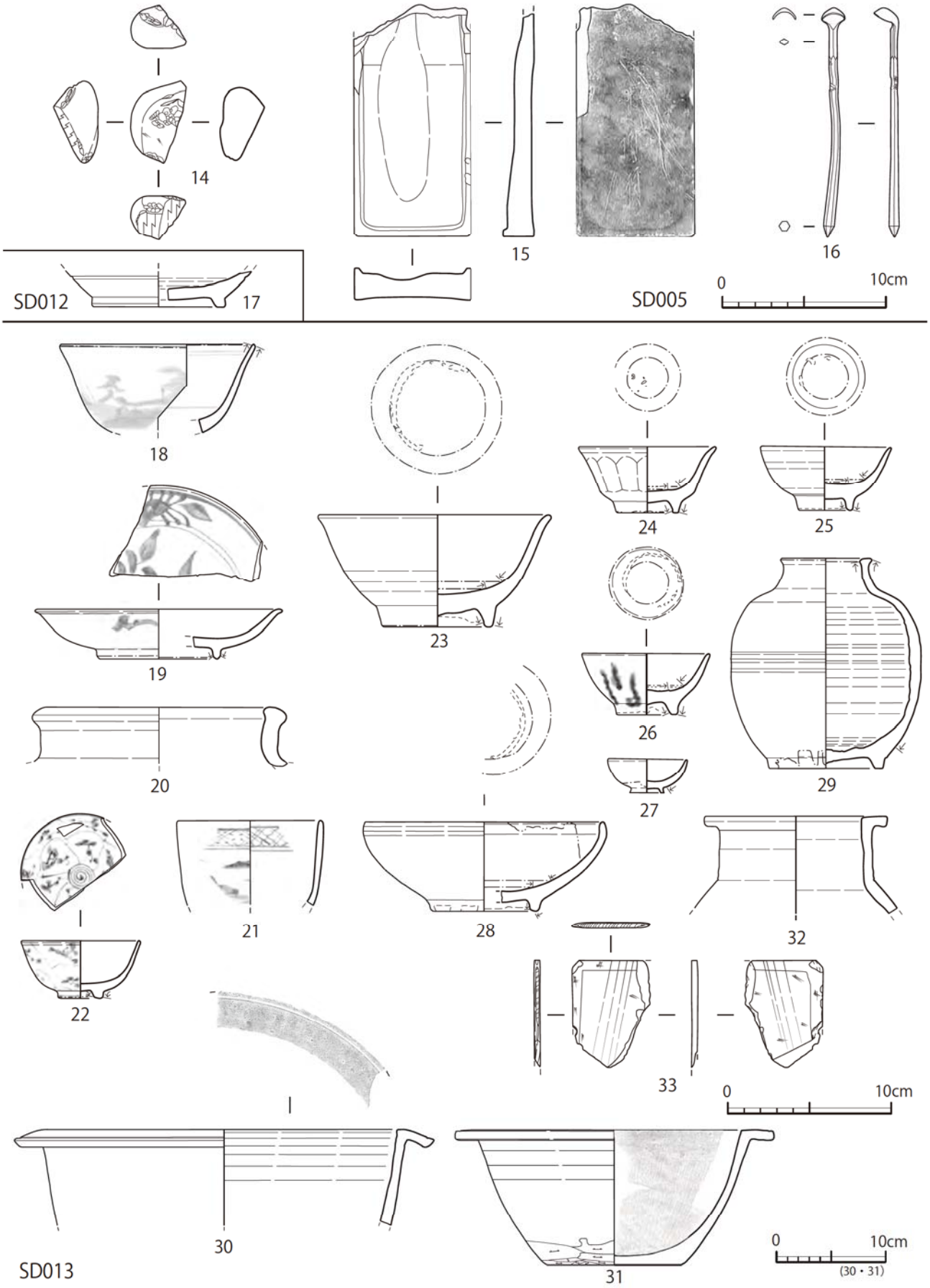
挿図番号 図版番号		種類	器種	分類	部位	法量(cm) 口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	観察事項	地区	出土地	区画
図版36	161	本土産 近現代磁器	小皿	—	口～底部	10.25	6.25	2.0	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に花文。クロム青磁。	Ⅶ	SK018 埋土	区画27
	162	本土産磁器	香炉	—	口～底部	17.8	10.3	8.7	畳付から外底及び内面口縁部下は露胎。素地は白色で緻密。外面胴部に突起が5つ。	Ⅶ	SK018 埋土	区画27
図版37	163	沖縄産 施釉陶器	碗	—	口～底部	12.8	7.7	6.15	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。外面は露胎。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は浅黄橙色。外面に赤色で巴文。	Ⅶ	SK036 埋土	区画31
	164	本土産 近現代磁器	碗	—	口～底部	13.9	4.6	6.4	畳付は露胎。素地は白色で細かい。型紙絵付け。	Ⅶ	SK091 埋上	区画26
	165	本土産 近現代磁器	碗	—	口～底部	13.2	4.6	6.1	畳付は露胎。素地は白色で細かい。内底に5つの胎土目。型紙絵付け。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	166	本土産 近現代磁器	碗	—	口～底部	13.1	4.8	6.1	畳付は露胎。素地は白色で細かい。内底に5つの胎土目。型紙絵付け。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	167	本土産 近現代磁器	碗	—	口～底部	13.5	5.1	5.5	畳付は露胎。素地は白色で細かい。内底に5つの胎土目。型紙絵付け。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	168	本土産 近現代磁器	小碗	—	口～底部	8.6	3.2	4.5	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に花文。銅版転写。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	169	本土産 近現代磁器	碗	—	口～底部	11.6	4.0	5.1	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面口縁部に緑色の2条の圏線。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	170	本土産 近現代磁器	小碗	色絵	口～底部	6.4	3.0	5.5	口縁部は釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外面の梅文は剥落している。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	171	本土産 近現代磁器	小碗	—	口～底部	8.4	3.6	5.1	畳付は露胎。素地は灰白色で緻密。外面に亀甲萬の文様が3つ。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	172	本土産 近現代磁器	小碗	—	口～底部	8.0	—	4.4	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面胴部に緑色の3条の圏線。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	173	本土産 近現代磁器	小皿	—	口～底部	12.8	7.6	3.6	畳付は露胎。外底は蛇の目状に釉剥ぎ。素地は灰白色で緻密。内面に梅文、竹文。外面に唐草文。型紙絵付け。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	174	本土産 近現代磁器	小皿	—	口～底部	11.7	6.0	2.55	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に花文。銅版転写。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	175	本土産 近現代磁器	小皿	—	口～底部	13.2	7.5	2.6	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に「壽」の文字と桃の文様。内底に「福」の文字。銅版転写。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	176	本土産 近現代磁器	小皿	—	口～底部	12.9	7.5	2.4	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に「福」、「禄」、「壽」の文字。内底に「福」の文字。銅版転写。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	177	本土産 近現代磁器	小皿	—	口～底部	11.0	7.0	1.8	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に草花文。銅版転写。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	178	本土産 近現代磁器	皿	—	口～底部	13.2	7.7	2.3	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に草文。銅版転写。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	179	本土産 近現代磁器	小皿	—	口～底部	13.0	—	2.4	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に文様あり。銅版転写。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	180	本土産 近現代磁器	小皿	—	口～底部	12.0	—	3.1	高台内は蛇の目状釉剥ぎ。畳付は露胎。外底は蛇の目状に釉剥ぎ。素地は白色で緻密。内面に文様あり。外面下部及び高台に圏線。銅版転写。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
図版38	181	本土産 近現代磁器	小皿	—	口～底部	7.2	5.6	2.0	六角皿。畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に花文、襷文。内底に魚文。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	182	本土産 近現代磁器	皿	—	口～底部	長 15.9 短 11.1	長 11.6 短 6.5	3.0	角皿。畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に文様、外面に菱形文。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	183	本土産 近現代磁器	小杯	色絵	口～底部	6.0	2.4	2.8	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に文様あり。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	184	本土産 近現代磁器	小杯	—	口～底部	6.0	2.1	2.7	畳付は露胎。素地は白色で緻密。高台形状は方形を呈する。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	185	本土産 近現代磁器	蓋	—	—	8.0	—	2.7	接地面は釉剥ぎ。外面に文様あり。摘み部付近に小孔。孔径3.1mm。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	186	沖縄産 施釉陶器	碗	—	口～底部	14.0	6.4	6.7	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗付。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は浅黄橙色。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	187	沖縄産 施釉陶器	碗	—	底部	—	6.2	—	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗付。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は灰白色。外面に呉須と褐釉で花文。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	188	沖縄産 施釉陶器	蓋	—	—	11.8	—	—	外面は黒釉を施釉した後、蛇の目状に釉剥ぎ。内面は露胎。素地は浅黄橙色。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	189	沖縄産 施釉陶器	壺	—	口～底部	11.5	9.2	16.8	内外面に黒釉を施釉。口唇部と畳付は釉剥ぎ。素地は浅黄橙色。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26

第７表　遺構出土遺物観察一覧（Ⅶ地区）h

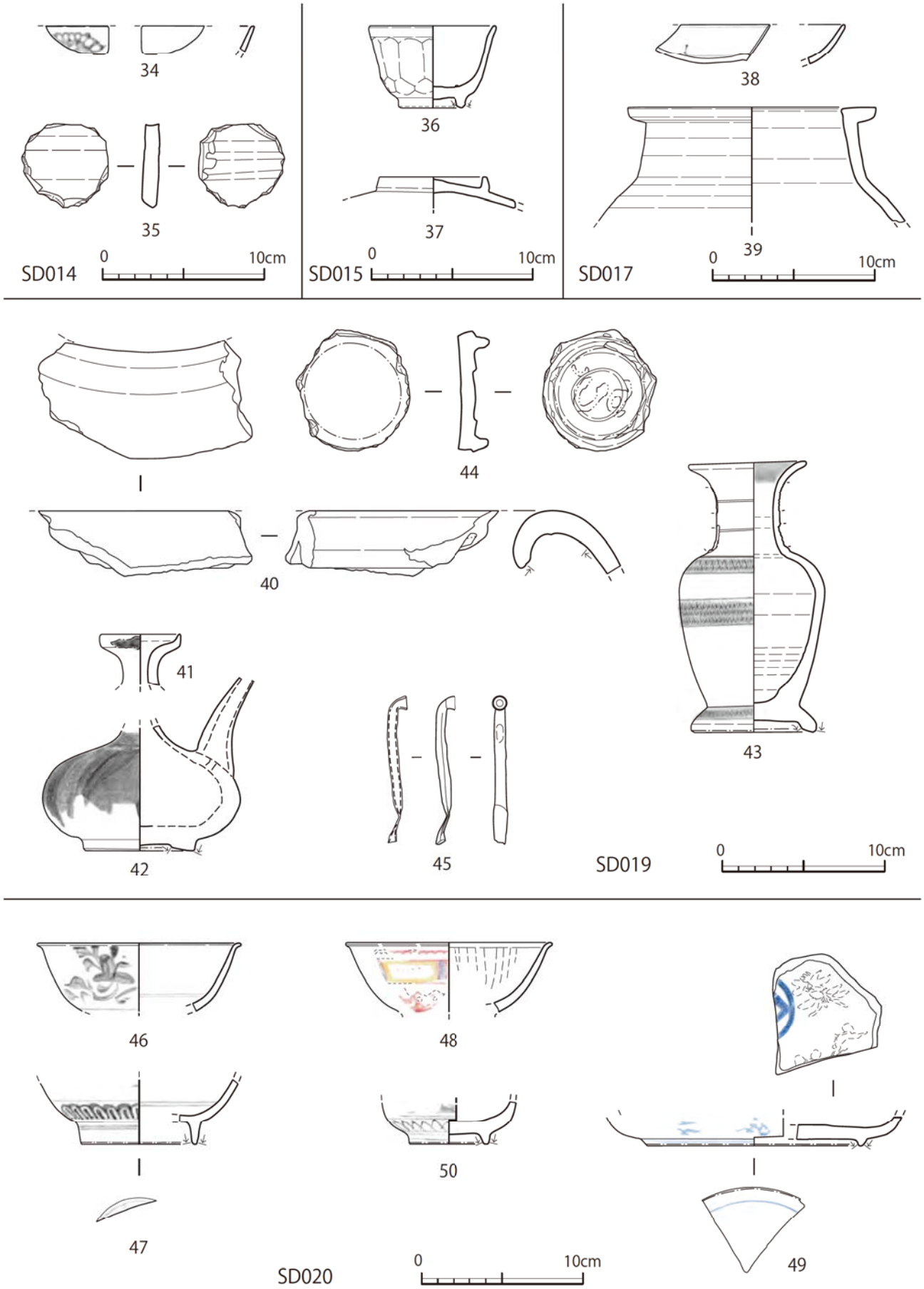
挿図番号 図版番号		種類	器種	分類	部位	法量(cm) 口径(長軸)	底径(短軸)	器高(厚さ)	観察事項	地区	出土地	区画
図版38	190	沖縄産施釉陶器	壺	—	口縁部	12.0	—	—	内外面に黒釉を施釉。口唇部は釉剥ぎ。素地は浅黄橙色。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	191	沖縄産無釉陶器	壺	—	口～底部	18.8	19.0	43.2	口縁部は逆「L」字状を呈する。素地は暗赤褐色。外面口縁部下部に沈線、2本の線刻あり。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	192	沖縄産無釉陶器	壺	—	口縁部	12.7	—	—	口縁部は逆「L」字状を呈する。素地は暗赤褐色。外面口縁部下部に沈線。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	193	沖縄産無釉陶器	甕	—	口縁部	44.9	—	—	素地は赤褐色。外面口縁部下部に沈線で波状文と貼付した丸文。口縁部下部に漆喰が付着する。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
	194	ガラス製品	瓶	—	口～底部	1.5	2.2	3.3	いかり肩で底形は円形。色調は半透明のコバルト色。気泡がみられる。	Ⅶ	SK091 埋土	区画26
図版39	195	本土産近現代磁器	皿	—	口～底部	—	—	2.85	角皿。畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に草花文、「福」の文字。	Ⅶ	SK101 埋土	区画28
	196	沖縄産施釉陶器	鉢	—	底部	—	9.6	—	外面胴下部から外底及び内底は釉剥ぎ。素地は浅黄橙色。	Ⅶ	SK119 埋土	区画28
	197	沖縄産無釉陶器	袋物	—	底部	—	8.0	—	素地はにぶい赤褐色。外面は白土で鹿の子斑の文様。外底に「紀元二〇〇百年作」の刻字あり。	Ⅶ	SK142 埋土	区画28
	198	沖縄産施釉陶器	袋物	—	底部	—	8.0	—	外面に黒釉を施釉。外面胴下部から外底及び内面は露胎。素地は灰色。	Ⅶ	SK148 埋土	—
	199	青銅製品	簪	—	—	10.0	—	—	ジーファー。匙状。カブ厚1㎜、カブ長10.8㎜、頸長19.0㎜、竿長69.4㎜。頸断面、竿断面ともに六角形。重量9.21g。	Ⅶ	SK150 1層	—
	200	石器	磨石	—	—	10.5	8.8	4.3	表裏面に磨面。表裏中央、側面に敲打痕。表裏ともに中央にくぼみがみられる。重量660.16g。砂岩。	Ⅶ	SK174 埋土	—
	201	ガラス製品	瓶	—	底部	—	3.6	—	底形は円形。色調は透明。大きめの気泡がみられる。	Ⅶ	SK194 埋土	—
	202	ガラス製品	瓶	—	口～底部	1.9	3.4	9.2	底形は円形。色調は透明。気泡がみられる。	Ⅶ	SK203 埋土	区画28
	203	本土産近現代磁器	碗	—	口～底部	12.8	4.6	6.2	畳付は露胎。素地は白色で細かい。型紙絵付け。	Ⅶ	SK204 ①-1	区画28
	204	本土産近現代磁器	碗	—	口～底部	13.5	4.4	5.9	畳付は露胎。素地は白色で細かい。型紙絵付け。	Ⅶ	SK204 ②-1	区画28
	205	本土産近現代磁器	碗	—	口～底部	14.5	5.0	5.7	畳付は露胎。素地は白色で細かい。内底に5つの胎土目。型紙絵付け。	Ⅶ	SK204 ③-2	区画28
	206	本土産近現代磁器	碗	—	口～底部	12.9	4.6	5.85	畳付は露胎。素地は白色で細かい。内底に5つの胎土目。型紙絵付け。	Ⅶ	SK204 ⑤-3	区画28
	207	本土産近現代磁器	皿	—	口～底部	21.5	14.0	2.5	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に文様。銅版転写。	Ⅶ	SK204 ⑤-1	区画28
	208	本土産近現代磁器	小杯	—	口～底部	5.8	2.2	2.9	畳付から外底にかけて露胎。素地は白色で緻密。高台形状が花形を呈する。	Ⅶ	SK204 ⑦-8	区画28
	209	陶質土器	蓋	—	—	—	—	—	素地は橙色。混入物に微砂粒を含む。	Ⅶ	SK238 埋土	—
	210	ガラス製品	玉	—	—	1.85	1.85	—	色調は透明～暗赤褐色。中心の穴の長径、短径ともに0.4cm。重量10.05g。	Ⅶ	SX001 埋土	区画27
	211	青銅製品	定規	—	—	7.8	1.6	1.05	目盛が付く。銘らしきものがみられる。重量11.77g。	Ⅶ	SX013 埋土	区画31
	212	石製品	硯	—	—	7.6	5.8	2.1	表裏面に線条痕。重量66.7g。粘板岩。	Ⅶ	SX026 1層	区画26
	213	青銅製品	簪	—	—	8.7	—	—	側差。匙状。竿が一部破損。カブ厚0.6㎜。カブ長10.6㎜、頸長20.6㎜、竿長55.1㎜。頸・竿断面は楕円形。重量4.01g。	Ⅶ	SX026 1層	区画26
図版40	214	石器	砥石	—	—	12.0	5.6	6.3	角柱形で使用により長軸楔状となる。表裏側面に使用痕。重量495.23g。砂岩。	Ⅶ	SX030 床面直上	区画26
	215	ガラス製品	瓶	—	口～底部	3.8	4.0	6.5	底形は十角形。色調は白色。	Ⅶ	SX030 埋土	区画26
	216	石製品	石筆	—	—	3.65	0.6	—	断面は丸く、両端部はともに尖る。重量3.71g。ろう石。	Ⅶ	SX036 1層	—
	217	煙管	—	—	吸口	5.3	—	—	青銅製。小口径0.8cm、口付径0.5cm。重量6.33g。	Ⅶ	SX036 1層	—
	218	沖縄産施釉陶器	小壺	—	口～底部	2.2	3.8	4.9	内外面に黒釉を施釉。外面胴部下半から外底及び内面口縁部下は露胎。素地は灰白色。	Ⅶ	SX043 埋土	区画31



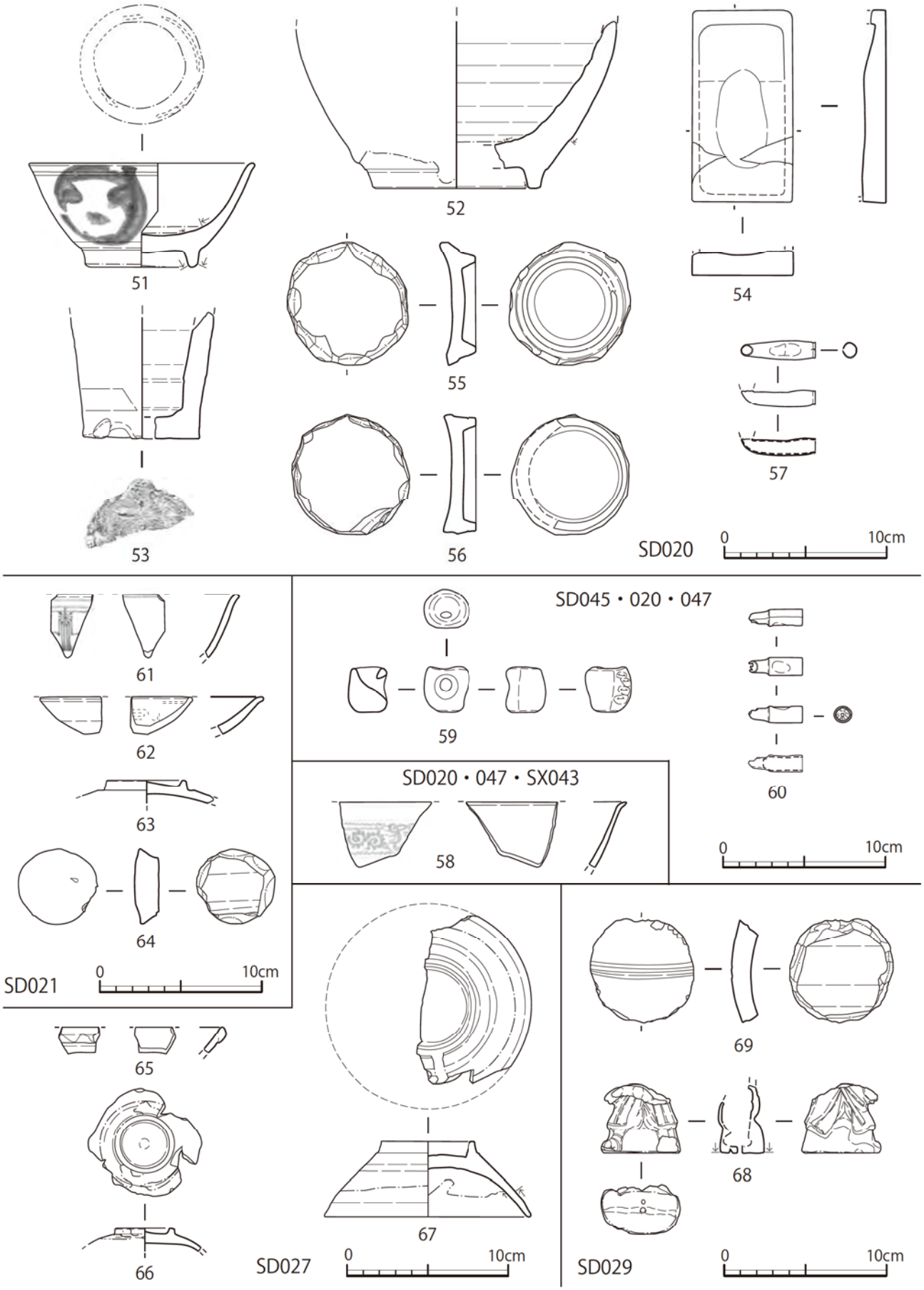
第 77 図　近世～近代の遺構 出土遺物 1 (Ⅶ地区)



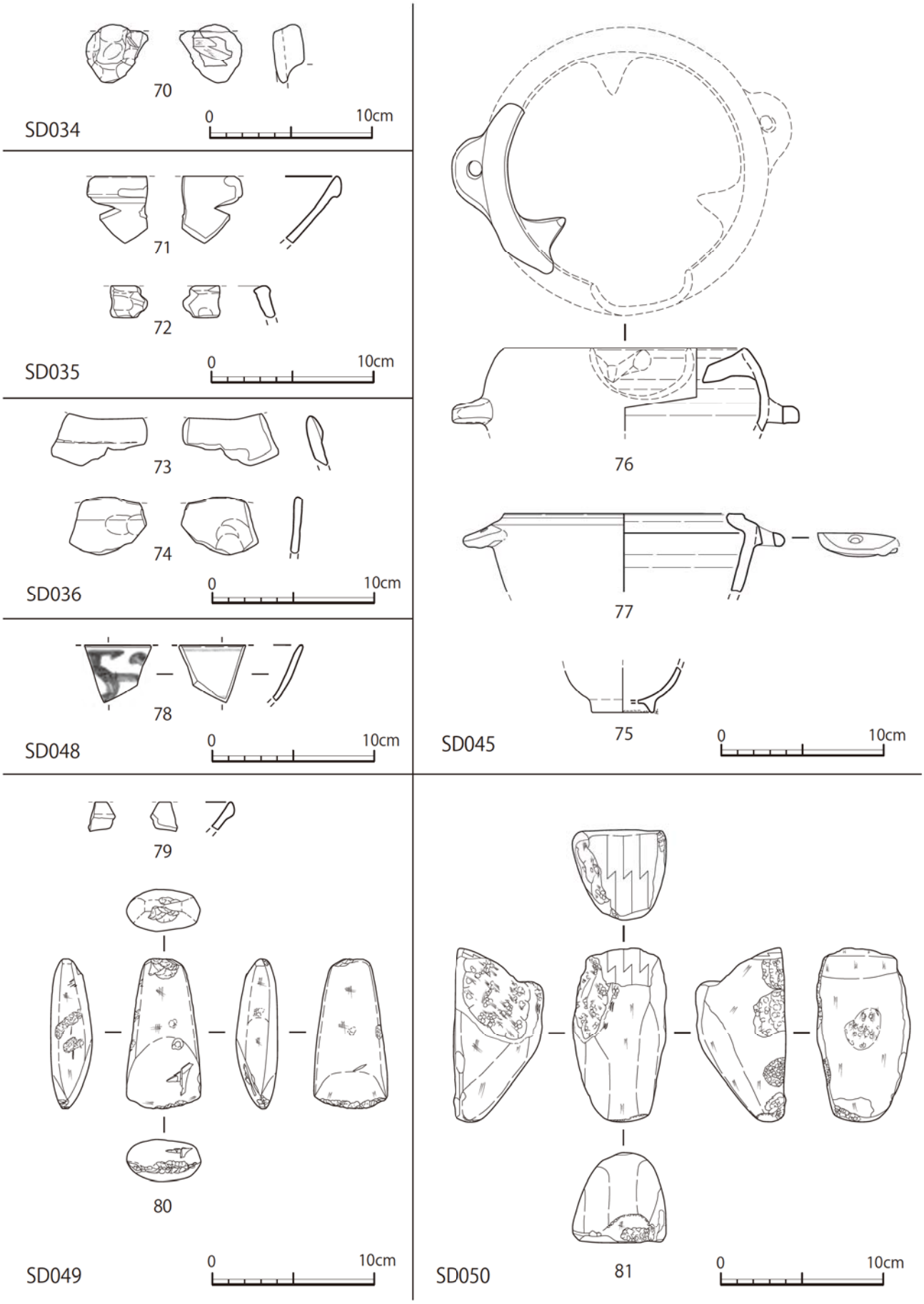
第 78 図　近世～近代の遺構 出土遺物 2 (Ⅶ地区)



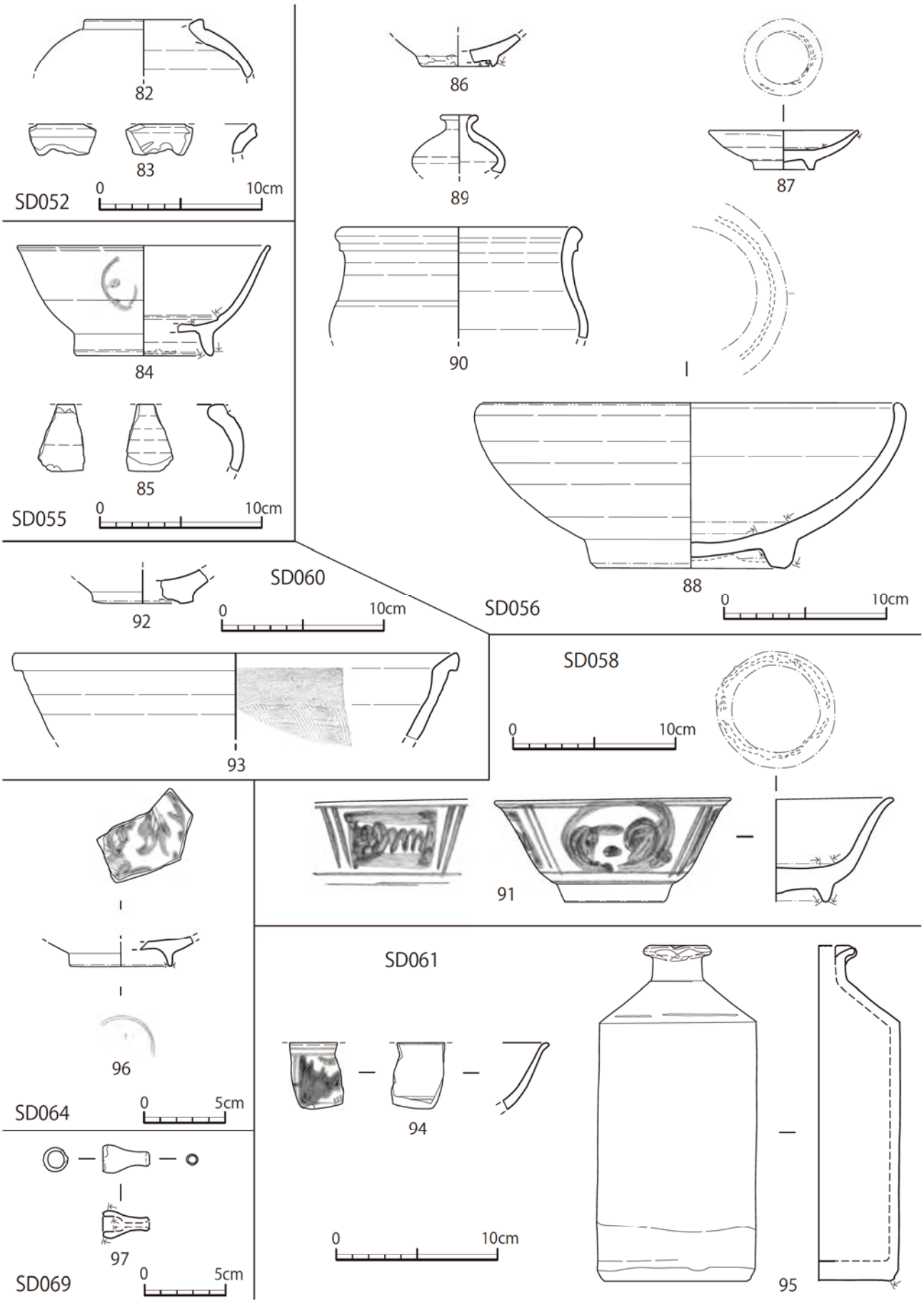
第 79 図　近世～近代の遺構 出土遺物 3 (Ⅶ地区)



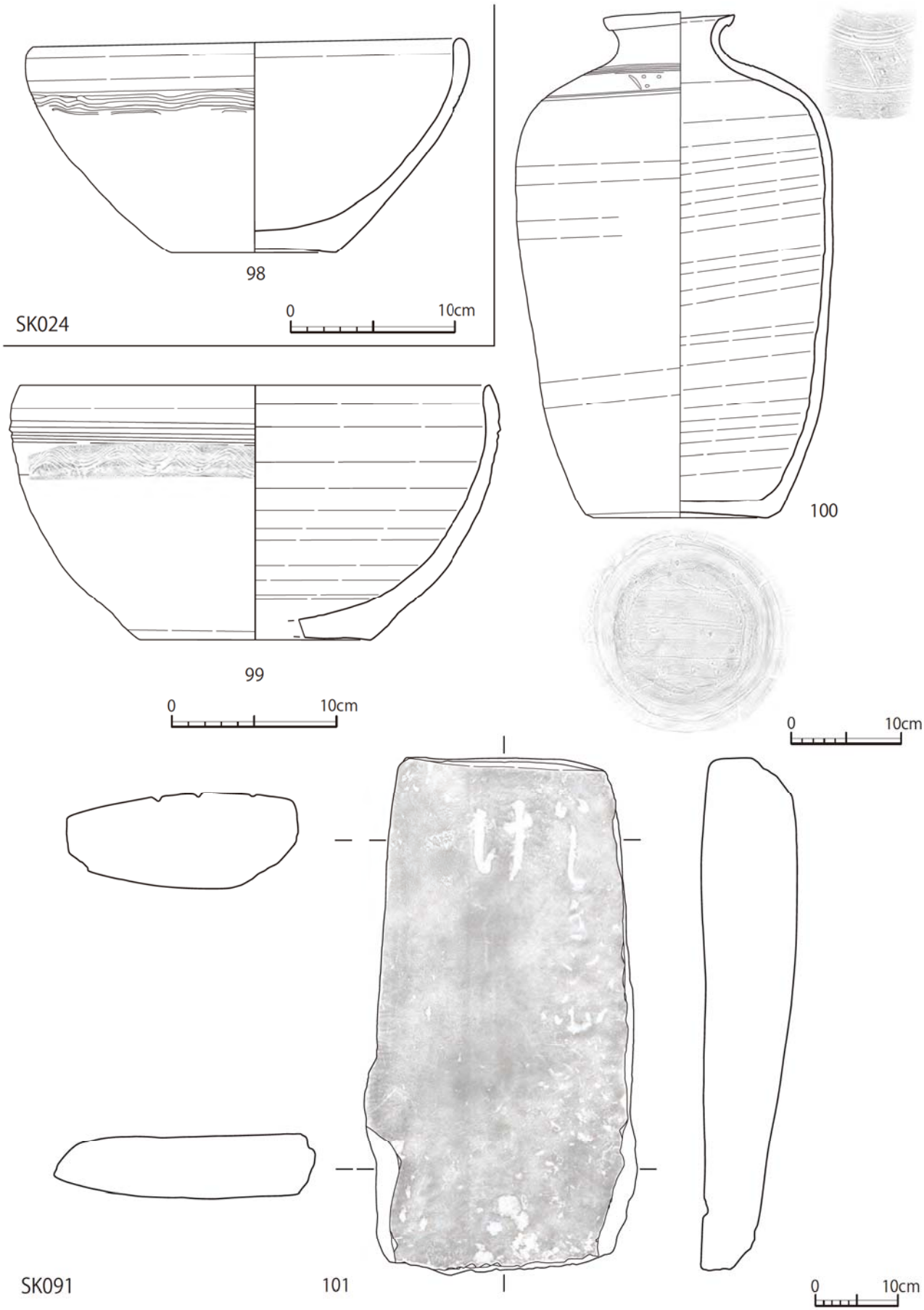
第 80 図　近世～近代の遺構 出土遺物 4 (Ⅶ地区)



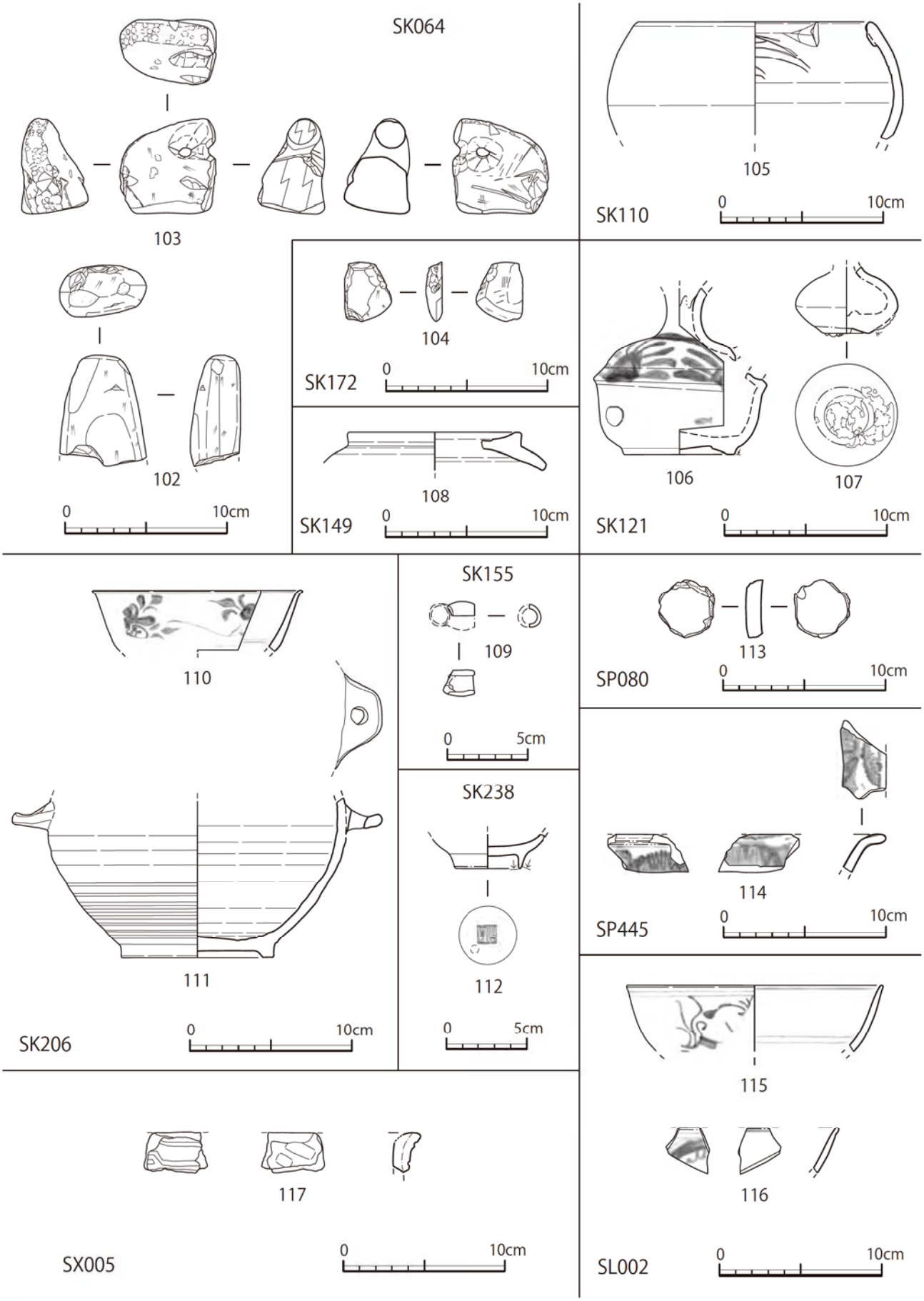
第 81 図　近世～近代の遺構 出土遺物 5 (Ⅶ地区)



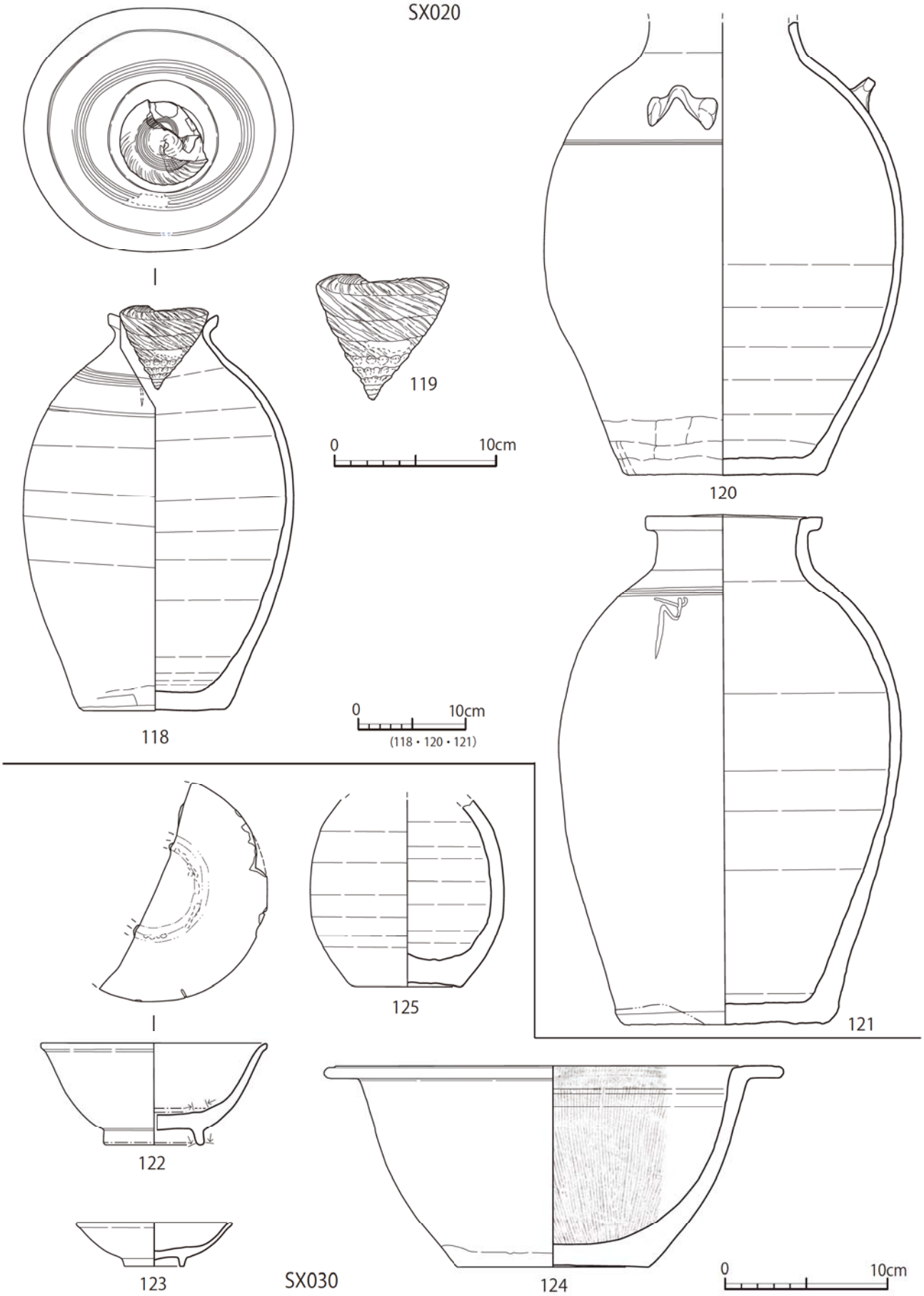
第 82 図　近世～近代の遺構 出土遺物 6 (Ⅶ地区)



第 83 図　近世～近代の遺構 出土遺物 7 (Ⅶ地区)



第 84 図　近世～近代の遺構 出土遺物８(Ⅶ地区)



第 85 図　近世～近代の遺構 出土遺物 9 (Ⅶ地区)

図版 27　近世～近代の遺構 出土遺物 1 (Ⅶ地区)

図版 28　近世～近代の遺構 出土遺物 2 (Ⅶ地区)

図版 29　近世～近代の遺構 出土遺物 3 (Ⅶ地区)

図版 30　近世～近代の遺構 出土遺物 4 (Ⅶ地区)

図版 31　近世～近代の遺構 出土遺物 5 (Ⅶ地区)

図版 32　近世～近代の遺構 出土遺物 6 (Ⅶ地区)

図版 33　近世～近代の遺構 出土遺物 7 (Ⅶ地区)

図版 34　近世～近代の遺構 出土遺物８(Ⅶ地区)

図版 35　近世～近代の遺構 出土遺物 9 (Ⅶ地区)

図版 36　近世～近代の遺構 出土遺物 10(Ⅶ地区)

図版 37　近世～近代の遺構 出土遺物 11(Ⅶ地区)

図版 38　近世～近代の遺構 出土遺物 12(Ⅶ地区)

図版 39　近世～近代の遺構 出土遺物 13(Ⅶ地区)

図版 40　近世～近代の遺構 出土遺物 14(Ⅶ地区)

Ⅷ地区

遺構内からは合計 6,171 点の遺物が出土した。主な遺物として、中国・タイ・本土産陶磁器、沖縄産陶器、土器、石器、石製品、銭貨、青銅製品、鉄製品、瓦、ガラス製品等が出土しており、最も多いのは沖縄産陶器である。陶磁器に関しては、近世～近代のものが主体である。ここでは代表的な 12 点について図化し、個々の所見は遺物観察表（第８表）でまとめる。また、全体の遺物出土状況については第 19 表にまとめ、付属の CD-ROM 内に所収した。

第８表　遺構出土遺物観察一覧（Ⅷ地区）a

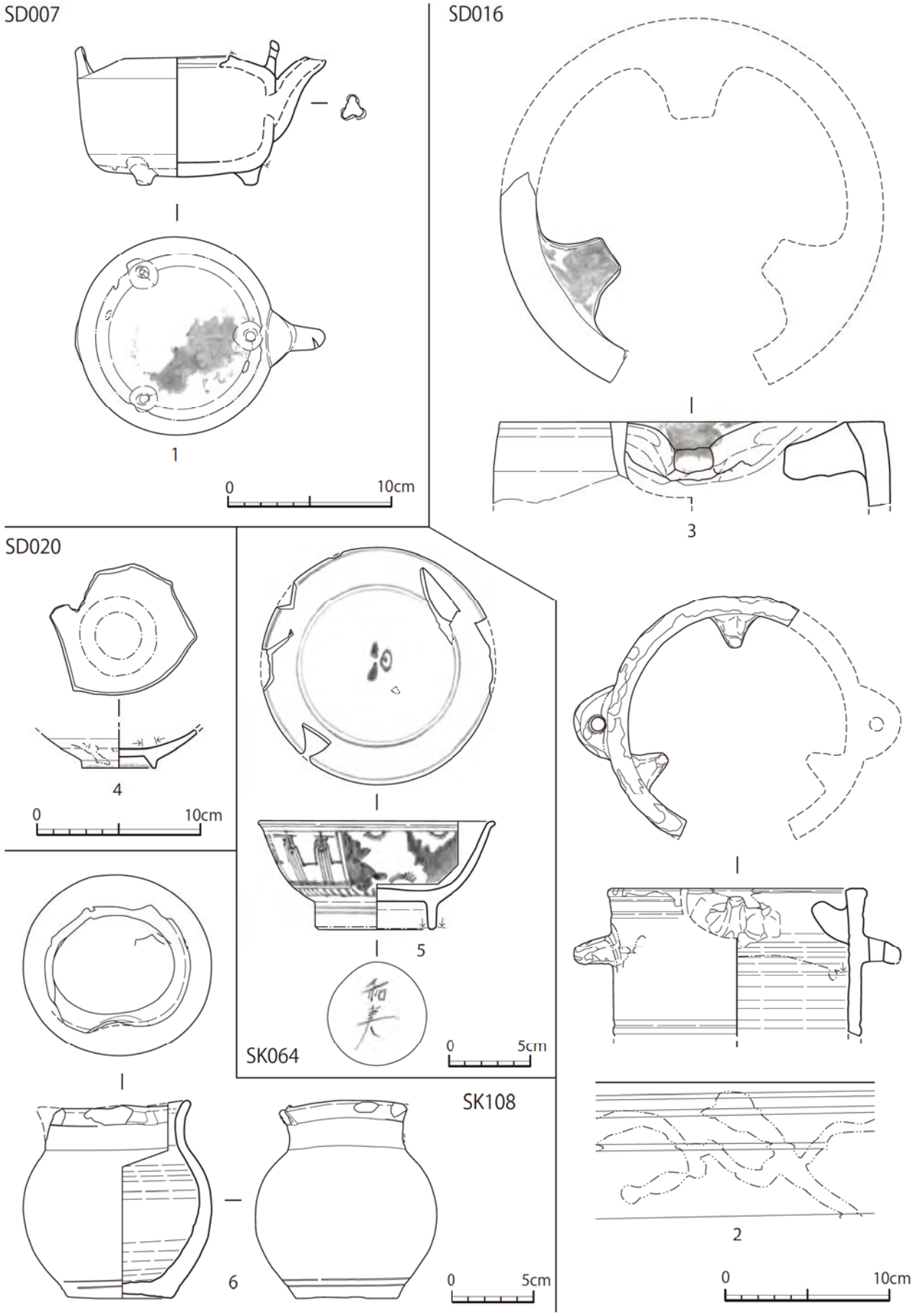
挿図番号 図版番号		種類	器種	分類	部位	法量(cm) 口径 (長軸)	法量(cm) 底径 (短軸)	法量(cm) 器高 (厚さ)	観察事項	地区	出土地	区画
第86図 図版41	1	沖縄産 施釉陶器	急須	—	口～底部	6.4	8.7	8.8	外面に瑠璃釉、内面に白化粧＋透明釉を掛け分け。外面脚部から外底は露胎。素地は灰白色。	Ⅷ	SD007 埋土	区画34
	2	沖縄産 施釉陶器	火炉	—	口縁部	15.8	—	—	外面及び内面口縁部下まで白化粧＋褐釉を施釉。素地は灰白色。外面に銅緑釉で文様あり。	Ⅷ	SD016 埋土	—
	3	陶質土器	火炉	—	口縁部	23.4	—	—	素地は灰色。内外面ロクロナデ。内耳部分に煤が付着。	Ⅷ	SD016 埋土	—
	4	本土産陶器	皿	—	底部	—	4.5	—	素地は橙色で細かい。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。内野山産。	Ⅷ	SD020 埋土	—
	5	染付	碗	—	口～底部	14.5	7.0	6.6	外反口縁。畳付は露胎。素地は白色で緻密。外底に「和美」の銘あり。徳化窯産。	Ⅷ	SK064 埋土	—
	6	沖縄産 無釉陶器	壺	—	口～底部	9.4	6.3	12.1	素地は暗赤褐色。外面口縁部直下及び胴上部に沈線。外面がアバタ状を呈する。	Ⅷ	SK108 埋土	—
第87図 図版41	7	染付	皿	—	口～底部	9.6	4.7	4.3	高台際から外底は露胎。素地は白色で細かい。内底に花文。内外面に細かい貫入がみられる。福建・広東系。	Ⅷ	SP120 埋土	—

第８表　遺構出土遺物観察一覧（Ⅷ地区）b

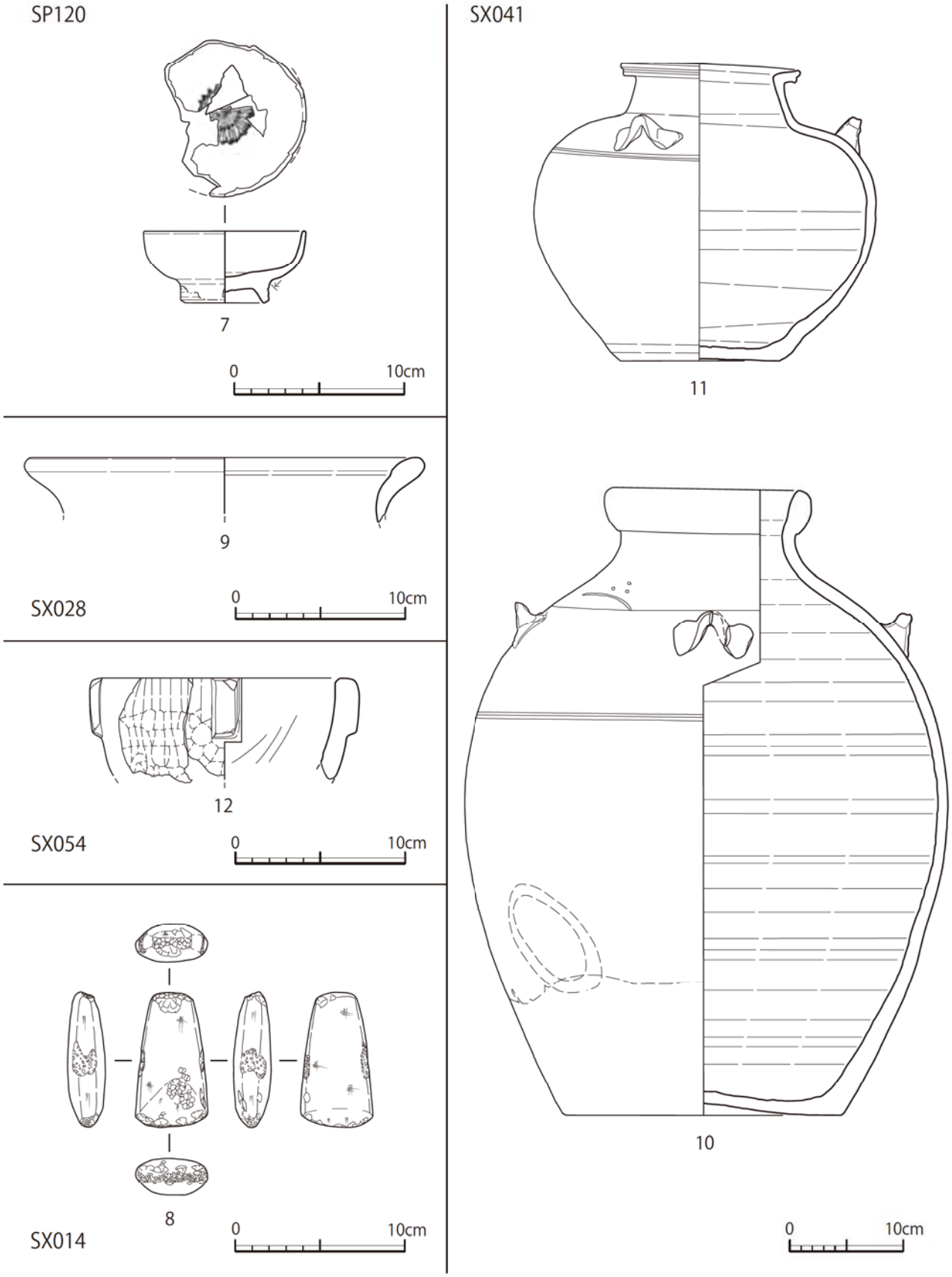
挿図番号 図版番号		種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	地区	出土地	区画
						口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)				
第87図 図版41	8	石器	石斧	—	—	—	—	—	全面研磨。表面に敲打痕。側面に敲打痕。刃部刃こぼれ。重量133.3g。緑色岩。	Ⅷ	SX014 埋土	区画34
	9	土器	壺	—	口縁部	23.6	—	—	素地はにぶい褐色。砂粒、褐色粒等を含む。内面口縁部下部に1条の沈線。宮古式土器か。	Ⅷ	SX028 埋土	—
第87図 図版42	10	沖縄産 無釉陶器	壺	—	口～底部	18.2	24.2	55.6	素地は暗赤褐色。外面胴上部に沈線。外面肩部に「__」の上「∴」の線刻あり。	Ⅷ	SX041 埋土	区画34
	11	沖縄産 無釉陶器	小壺	—	口～底部	15.75	14.0	26.25	素地は暗赤褐色。口唇部は平坦。外面口縁部に沈線。	Ⅷ	SX041 埋土	区画34
	12	滑石製品	鍋	—	口縁部	14.4	—	—	滑石製石鍋。外面に縦耳を持つ。内外面に削り痕。重量148.6g。	Ⅷ	SX054 埋土	—
図版42	13	ガラス製品	瓶	—	口～底部	1.5	2.8	6.4	底形は扁平八角形。側面に「東京鈴木」、「ベルツ目薬」のエンボス。色調は半透明のコバルト色。わずかに気泡がみられる。	Ⅷ	SD003 1層	—
	14	ガラス製品	瓶	—	口～底部	1.9	5.6	11.0	底形は円形。側面に「鈴虫香油」、スズムシのエンボス。底部に菊花型の陰刻。色調は透明。気泡がみられる。	Ⅷ	SD007 埋土	区画34
	15	ガラス製品	瓶	—	口～底部	2.1	3.8	8.2	底形は円形。色調は薄い青。気泡がみられる。	Ⅷ	SD007 埋土	区画34
	16	本土産 近現代磁器	小碗	B類	口縁部	7.0	—	—	素地は白色で緻密。外面に「祝凱旋」の銘あり。銅版転写。	Ⅷ	SD014 埋土	—
	17	陶質土器	目皿	—	—	9.0	8.4	1.0	素地は明黄褐色。直径1.7cm程の穴があけられる。	Ⅷ	SD014 埋土	—
	18	土器	壺	—	胴部	—	—	1.1	素地はにぶい橙色。混入物に砂粒、黒色鉱物等が含まれる。外面に陽刻で亀甲文、銘がみられる。東南アジア産。	Ⅷ	SD016 埋土	—
	19	ガラス製品	瓶	—	口～底部	4.3	4.8	5.0	六角形に成形される。色調は透明。気泡がみられる。	Ⅷ	SK047 埋土	区画34
	20	陶質土器	鉢	—	口～底部	12.0	7.8	9.4	口縁部に段を持つ。素地は橙色。内外面ロクロナデ。	Ⅷ	SK049 埋土	区画34
図版43	21	沖縄産 無釉陶器	甕	—	口～底部	47.4	21.0	36.2	口縁部が逆「L」字状を呈する。口唇部は平坦。素地は暗赤褐色。外面口縁部に沈線。外面胴上部に沈線、波状文、貼付した丸文があり、その下部に太い凸帯を巡らす。	Ⅷ	SK062 埋土	—
	22	ガラス製品	瓶	—	口～底部	5.1	5.4	4.1	底形は円形。底部に「日靴塗聯」のエンボス。色調は透明。気泡が多くみられる。	Ⅷ	SK064 埋土	—
	23	本土産磁器	杯	—	口縁部	7.4	—	—	素地は白色で緻密。外面に文様あり。内外面に細かい貫入がみられる。薩摩産。	Ⅷ	SK120 埋土	—
	24	ガラス製品	瓶	—	口～底部	2.5	2.8	5.2	底形は円形。底部に「6500」、「15」、「6」、「2」、「'12」のエンボス。色調は半透明の茶色。	Ⅷ	SK159 埋土	—
	25	ガラス製品	瓶	—	口～底部	6.3	6.6	6.1	底形は円形。底部に「18」のエンボス。色調は白色。	Ⅷ	SK159 埋土	—
	26	ガラス製品	瓶	—	口～底部	1.9	2.0	4.7	底形は円形。底部に「ABBOTT LAB.」「MADE IN U.S.A.」のエンボス。金属製の蓋が付着。	Ⅷ	SK159 埋土	—
	27	沖縄産 施釉陶器	碗	—	口～底部	13.9	6.2	6.9	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗付。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は灰白色。外面に呉須で巴文が3つ。	Ⅷ	SK201 埋土	区画34
	28	石製品	錘	—	—	7.9	5.3	4.3	全体に丸みを帯びる。中央に孔をあける。孔径11.6mm。重量223.21g。石灰岩。	Ⅷ	SK201 埋土	区画34

第８表　遺構出土遺物観察一覧（Ⅷ地区）c

挿図番号 図版番号		種類	器種	分類	部位	法量(cm) 口径(長軸)	底径(短軸)	器高(厚さ)	観察事項	地区	出土地	区画
図版43	29	沖縄産無釉陶器	香炉	—	口縁部	—	—	—	素地はにぶい赤褐色。混入物に粗い砂粒を多く含む。	Ⅷ	SK243 埋土	区画34
	30	沖縄産無釉陶器	香炉	—	底部	—	—	—	脚付き。素地は赤褐色。混入物に粗い砂粒を多く含む。内面がアバタ状を呈する。	Ⅷ	SK243 埋土	区画34
	31	石器	磨石	—	—	11.6	7.2	5.2	表裏面に磨面。裏面に敲打痕。重量760.18g。砂岩。	Ⅷ	SK243 埋土	区画34
図版44	32	沖縄産無釉陶器	水甕	—	口～底部	77.2	31.0	81.3	大形の水甕。口縁部が逆「L」字状を呈する。素地は赤褐色。外面口縁部に沈線。外面胴上部に沈線と貼付した丸文があり、その下部に太い凸帯を巡らす。胴部に孔が開けられ、その周りには漆喰が残る。	Ⅷ	SK256 埋土	—
	33	円盤状製品	—	—	—	3.61	3.26	0.6	素材は陶質土器。重量7.47g。	Ⅷ	SP153 埋土	—
	34	本土産近現代磁器	碗	—	口～底部	11.3	5.0	5.15	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に文様あり。畳付に砂粒が付着。銅版転写。	Ⅷ	SX014 埋土	区画34
	35	本土産近現代磁器	小杯	—	口～底部	6.3	2.55	2.45	畳付は露胎。素地は白色で緻密。内面に銅版転写で草花文。口縁部は吹き絵技法による彩色。	Ⅷ	SX014 埋土	区画34
	36	本土産近現代磁器	小杯	—	口～底部	4.7	2.6	2.9	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面は黒色、内面は赤色で文様あり。	Ⅷ	SX014 埋土	区画34
	37	本土産近現代磁器	角皿	—	口～底部	15.6	7.3	3.4	八角皿。畳付は露胎。素地は白色で緻密。内底に文字。	Ⅷ	SX014 埋土	区画34
	38	石製品	硯	—	—	7.45	4.7	1.8	海部のみ残る。外面に黒色塗料が残存。重量86.59g。砂岩。	Ⅷ	SX014 埋土	区画34
	39	本土産近現代磁器	碗	—	口～底部	13.5	4.85	5.35	畳付は露胎。素地は白色で細かい。内底に5つの胎土目。型紙絵付け。	Ⅷ	SX020 埋土	—
	40	沖縄産無釉陶器	壺	—	口～底部	12.8	18.5	45.3	素地は暗赤褐色。外面口縁部下部及び胴上部に沈線。胴上部に「八」の下に「一」の字が入る線刻あり。	Ⅷ	SX020 埋土	—
	41	沖縄産無釉陶器	壺	—	口～底部	13.0	18.2	46.1	素地は暗赤褐色。外面口縁部下部及び胴上部に沈線。胴上部に「×」の下に「・」線刻あり。	Ⅷ	SX020 埋土	—
	42	本土産近現代磁器	小碗	—	口～底部	8.1	2.95	5.0	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に文様、内面口縁部に2条の圏線。外底に「嘉」の銘あり。	Ⅷ	SX041 埋土	区画34
	43	本土産近現代磁器	小碗	色絵	口～底部	8.2	3.45	4.8	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に文様があるが、不明瞭。外底に○内に「丈」の銘あり。	Ⅷ	SX041 埋土	区画34
	44	円盤状製品	—	—	—	4.0	3.7	0.2	素材は白磁。重量15.66g。	Ⅷ	SX047 埋土	区画34
	45	円盤状製品	—	—	—	3.2	3.0	0.9	素材は沖縄産無釉陶器。重量15.22g。	Ⅷ	SX050 埋土	—
	46	円盤状製品	—	—	—	3.8	3.65	0.8	素材は沖縄産無釉陶器。重量19.36g。	Ⅷ	SX050 埋土	—
	47	円盤状製品	—	—	—	4.95	4.6	0.75	素材は沖縄産無釉陶器。重量21.69g。	Ⅷ	SX050 埋土	—
	48	円盤状製品	—	—	—	5.3	4.95	1.45	素材は沖縄産無釉陶器。重量58.77g。	Ⅷ	SX050 埋土	—
	49	円盤状製品	—	—	—	5.1	4.9	0.9	素材は沖縄産施釉陶器。重量31.90g。	Ⅷ	SX050 埋土	—
	50	石製品	硯	—	—	5.89	4.7	1.1	陸部のみ残る。表裏面、側面に線条痕。重量52.32g。粘板岩。	Ⅷ	SX059 埋土	—



第 86 図　近世～近代の遺構 出土遺物 1 (Ⅷ地区)



第 87 図　近世～近代の遺構 出土遺物 2 (Ⅷ地区)

図版 41　近世～近代の遺構 出土遺物 1 (Ⅷ地区)

図版 42　近世～近代の遺構 出土遺物 2 (Ⅷ地区)

図版 43　近世～近代の遺構 出土遺物 3 (Ⅷ地区)

図版 44　近世～近代の遺構 出土遺物 4 (Ⅷ地区)

IX地区

遺構内からは合計 11,660 点の遺物が出土した。主な遺物として、中国・タイ・本土産陶磁器、沖縄産陶器、土器、石器、石製品、貝・骨・木・玉製品や漆製品、銭貨、青銅製品、鉄製品、瓦、ガラス製品等、他の地区より多種にわたる遺物が出土している。最も多いのは沖縄産陶器である。中国産陶磁器や初期沖縄産陶器の出土量は他の地区よりも多い。Ⅶ・Ⅷ地区同様に、陶磁器に関しては、近世～近代のものが主体である。ここでは代表的な 28 点について図化し、個々の所見は遺物観察表（第９表）でまとめる。また、全体の遺物出土状況については第 20 表にまとめ、付属の CD-ROM 内に所収した。

第９表　遺構出土遺物観察一覧（IX地区）a

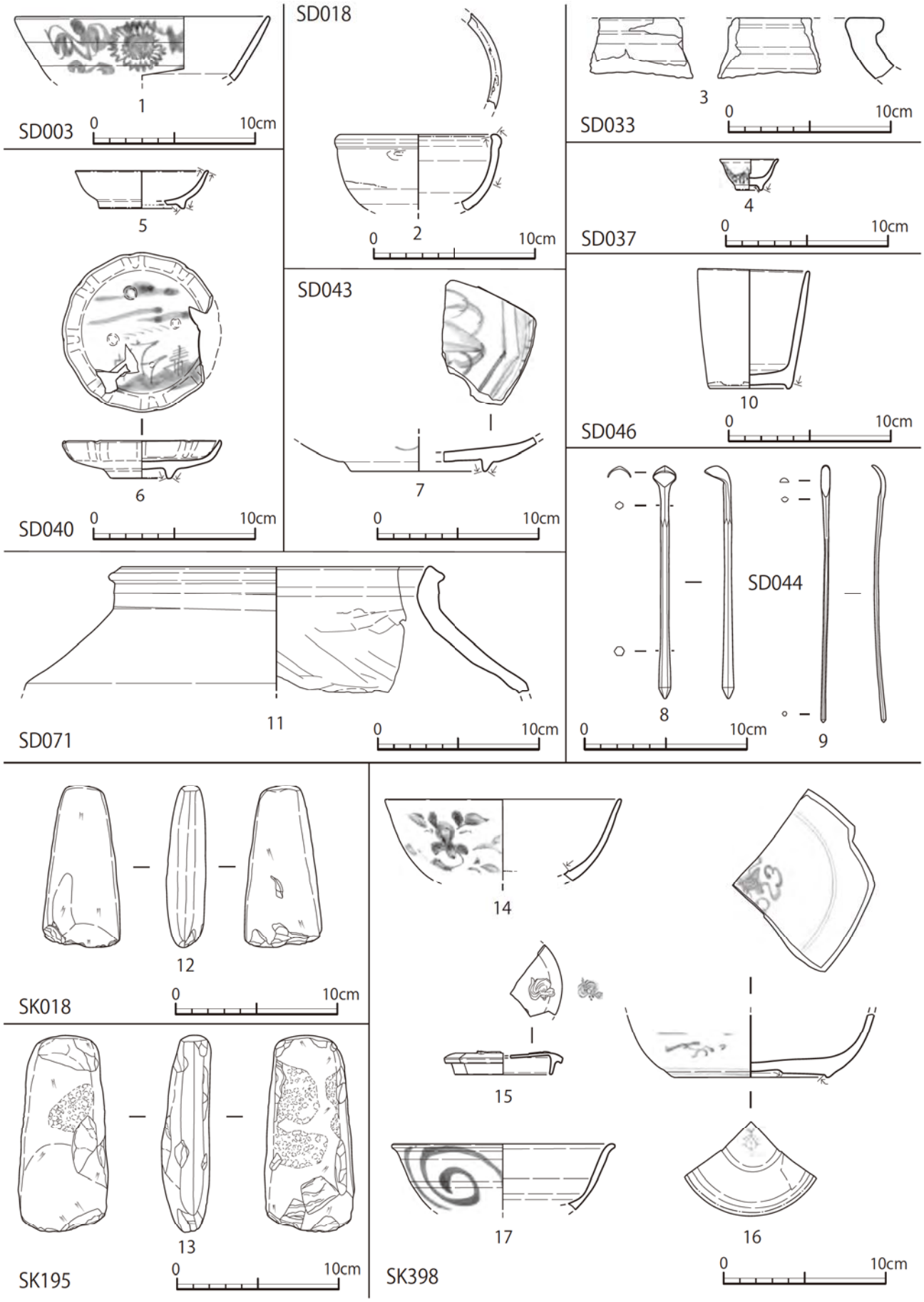
挿図番号 図版番号		種類	器種	分類	部位	法量(cm)			観察事項	地区	出土地	区画
						口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)				
第88図 図版45	1	染付	碗	—	口縁部	15.8	—	—	直口口縁。素地は灰白色で緻密。外面に草花文。福建・広東系。	IX	SD003 埋土	—
	2	褐釉	鉢	—	口縁部	9.7	—	—	素地は灰色。外面口縁部に浅い沈線。	IX	SD018 埋土	—
	3	褐釉	壺	—	口縁部	—	—	—	口唇部は平坦。素地は褐色。粗い砂粒を多く含む。	IX	SD033 埋土	—
	4	染付	小杯	—	口～底部	3.6	1.7	1.45	外反口縁。畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に文様あり。徳化窯産。	IX	SD037 埋土	—
	5	白磁	皿	—	口～底部	8.2	2.3	5.3	型成形。畳付は露胎。素地は白色で緻密。畳付に砂目。徳化窯産。	IX	SD040 埋土	—
	6	本土産 近現代磁器	皿	—	口～底部	9.8	3.8	2.3	花形に成形される。畳付は露胎。素地は白色で緻密。内底に文様あり。薩摩産。	IX	SD040 埋土	—
	7	染付	皿	—	底部	—	8.2	—	素地は白色で緻密。内外面に文様あり。内外面に細かい貫入がみられる。	IX	SD043 埋土	—
	8	青銅製品	簪	—	—	—	—	—	ジーファー。匙状。カブ厚1.8㎜、カブ長12.6㎜、頸長27.9㎜、竿長105.0㎜。頸断面、竿断面ともに六角形。重量29g。	IX	SD044 埋土	—
	9	青銅製品	簪	—	—	—	—	—	匙差。耳かき状。カブ厚2㎜、カブ長18.1㎜、頸長25.9㎜、竿長115.2㎜。頸断面、竿断面ともに六角形。重量7.8g。	IX	SD044 埋土	—
	10	本土産陶器	蕎麦 猪口	—	口～底部	6.85	4.9	7.35 (最大高)	畳付から外底は露胎。素地は白色で細かい。内外面に粗い貫入がみられる。関西系。	IX	SD046 埋土	—
	11	褐釉	壺	—	口縁部	—	—	—	口縁部は三角形、口唇部は平坦。素地は橙色。石英、砂粒等を含む。	IX	SD071 埋土	区画33
	12	石器	石斧	—	—	10.5	4.8	2.45	全面研磨。側面に敲打痕。刃部刃こぼれ。重量187.15g。輝緑岩。	IX	SK018 埋土	—
	13	石器	石斧	—	—	12.15	5.6	2.5	全面に敲打痕。表裏面に磨面。重量352.09g。輝緑岩。	IX	SK195 埋土d012	—
	14	染付	碗	—	口縁部	14.6	—	—	直口口縁。素地は白色で緻密。外面に草花文。徳化窯産。	IX	SK398 1層	区画33
	15	中国産 無釉陶器	蓋	—	—	7.3	6.1	—	素地は灰赤色で緻密。外面に貼付した花文。宜興窯産。	IX	SK398 1層	区画33
	16	本土産磁器	鉢	染付	底部	—	9.4	—	高台内は蛇の目状釉剥ぎ。素地は白色で緻密。外面に文様、内底に花文。外底に銘あり。外面の貫入は細かく、内面はやや粗い。肥前産。	IX	SK398 1層	区画33
	17	本土産陶器	碗	—	口縁部	13.8	—	—	素地は淡黄色で細かい。外面に渦巻文。瀬戸・美濃系。	IX	SK398 2層	区画33
第89図 図版45	18	煙管	—	—	雁首	—	—	—	瓦質製品で柱状形。素地は灰色。火皿に煤付着。重量5.1g。	IX	SK052 埋土	—
	19	煙管	—	—	吸口	2.3	—	—	沖縄産施釉陶器製。小口径1.15cm、小口内径0.85cm、口付径0.55cm。小口は凹形。素地は浅黄橙色。重量1.64g。	IX	SK230 埋土	—

第９表　遺構出土遺物観察一覧（Ⅸ地区）b

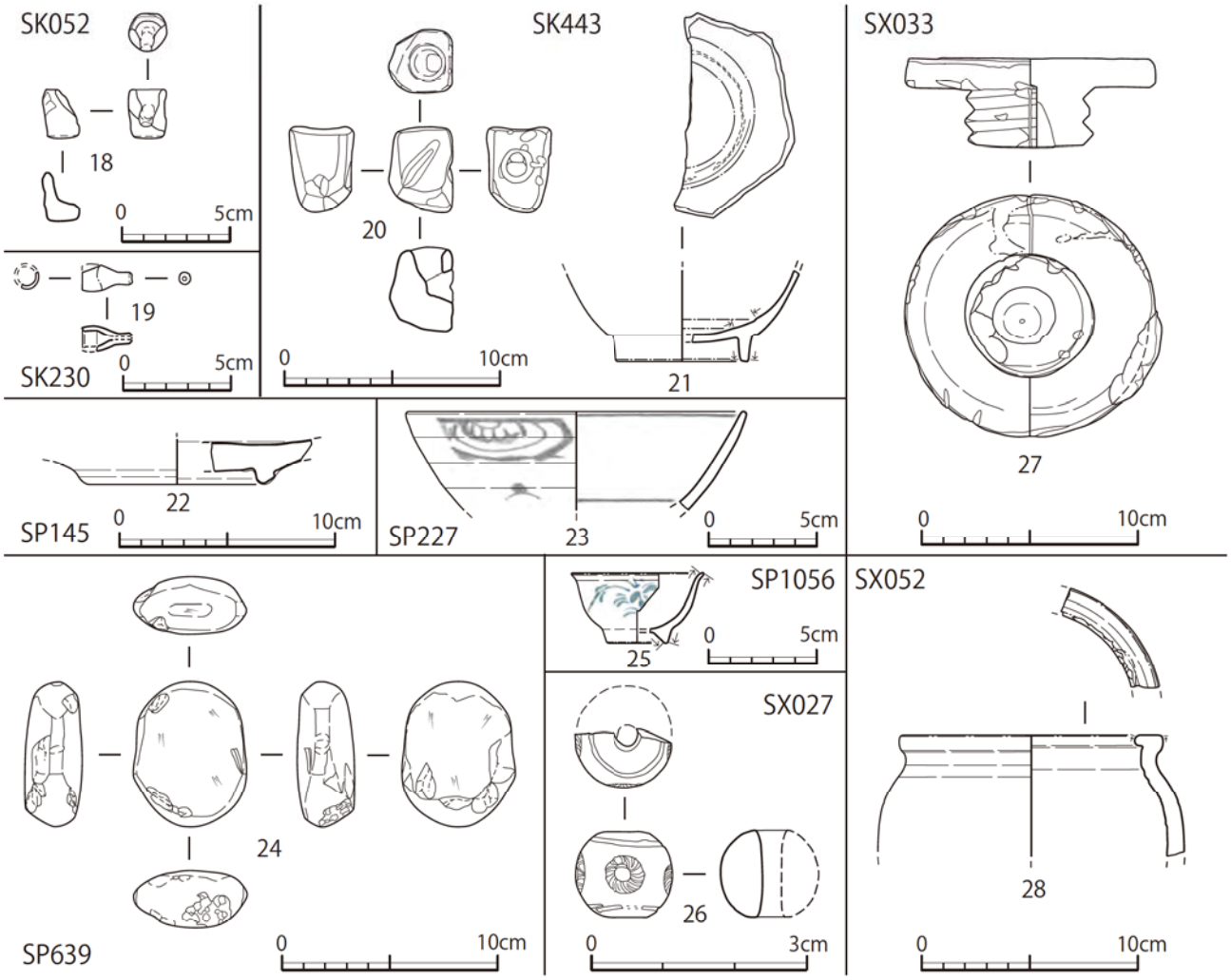
挿図番号 図版番号		種類	器種	分類	部位	法量(cm) 口径 (長軸)	底径 (短軸)	器高 (厚さ)	観察事項	地区	出土地	区画
第89図 図版45	20	煙管	—	—	雁首	—	—	—	瓦質製品で柱状形。素地は灰白色。重量46.3g。	Ⅸ	SK443 埋土	区画33
	21	沖縄産 施釉陶器	碗	—	底部	—	6.0	—	内外面に透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は白色。	Ⅸ	SK443 埋土	区画33
	22	青磁	盤	—	底部	—	8.0	—	外底釉剥ぎ。素地は灰白色で緻密。内外面に粗い貫入がみられる。	Ⅸ	SP145 埋土	—
	23	染付	碗	—	口縁部	15.8	—	—	直口口縁。素地は灰白色で緻密。外面に花文、内面口縁部に圏線。内外面に細かい貫入がみられる。福建・広東系。	Ⅸ	SP227 埋土	—
第89図 図版46	24	石器	石斧	—	—	6.75	5.25	2.65	表裏面に磨面。側面に敲打痕。重量156.53g。緑色岩。	Ⅸ	SP639 埋土	—
	25	色絵	小杯	—	口～底部	6.2	2.8	3.2	外反口縁。畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に草花文。徳化窯産。	Ⅸ	SP1056 埋土	区画33
	26	玉製品	トンボ玉	—	—	1.36	1.19	—	外面に白線と花文あり。色調は濃紺色。孔径2.8mm。	Ⅸ	SX027 埋土	—
	27	本土産陶器	蓋	—	—	—	—	—	外面に褐釉を施釉。素地は灰色。形状はネジ状を呈する。継目がみられる。	Ⅸ	SX033 埋土	—
	28	本土産陶器	壺	—	—	12.2	—	—	口唇部は平坦。素地は赤褐色。砂粒、黒色粒等を含む。薩摩産。	Ⅸ	SX052 埋土	—
図版46	29	石製品	石盤	—	—	16.2	14.4	0.4	表裏面に線条痕。重量173.90g。粘板岩。	Ⅸ	SD018 埋土	—
	30	石製品	石筆	—	—	2.9	0.6	—	外面の面取りは細かい。重量1.56g。ろう石。	Ⅸ	SD018 埋土	—
	31	円盤状製品	—	—	—	4.35	4.3	0.5	素材は本土産近現代磁器。重量22.24g。	Ⅸ	SD031 埋土	—
	32	円盤状製品	—	—	—	5.75	5.1	1.6	素材は赤瓦。重量53.46g。	Ⅸ	SD037 埋土	—
	33	沖縄産 施釉陶器	小杯	—	口～底部	6.0	2.4	2.6	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。畳付は露胎。素地は白色。外面に呉須で「普天間」の文字。	Ⅸ	SD040 埋土	—
	34	青銅製品	簪	—	—	6.4	—	—	髪差。カブは六角形を呈する。カブ厚1.5mm、頸長7.9mm、ムディ長7.38mm、竿長46.06mm。頸断面は円形、竿断面は方形。重量6.59g。	Ⅸ	SD046 埋土	—
	35	沖縄産 施釉陶器	碗	—	口～底部	12.4	5.5	5.9	内外面に黒釉を単掛け。外面胴下部から外底及び内底は露胎。畳付にアルミナを塗付。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は灰白色。	Ⅸ	SD052 埋土	区画32
	36	石器	石斧	—	—	8.0	4.4	2.45	基部が残る。全面に敲打痕。所々に磨面がみられる。重量149.09g。緑色岩。	Ⅸ	SD052 埋土	区画32
	37	沖縄産 施釉陶器	壺	—	底部	—	3.1	—	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。畳付から外底は露胎。素地は灰白色。	Ⅸ	SD067 埋土	区画33
	38	ガラス製品	瓶	—	口～底部	1.4	2.0	5.7	角縁。なで肩で底形は円形。色調は透明。気泡含む。	Ⅸ	SK035 埋土	—
	39	煙管	—	—	雁首	—	—	—	沖縄産施釉陶器製。火皿径1.65cm、小口径1.6cm、小口内径1.15cm。火皿内外面に灰釉。小口は平坦。素地は灰白色。重量3.39g。	Ⅸ	SK084 埋土	—
	40	円盤状製品	—	—	—	5.0	4.8	0.8	素材は沖縄産無釉陶器。重量27.29g。	Ⅸ	SK095 埋土	—
	41	本土産 近現代磁器	碗	—	口～底部	11.6	4.2	5.3	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に草花文と文字。銅版転写。	Ⅸ	SK185 埋土	—
	42	沖縄産 施釉陶器	碗	—	口～底部	13.4	—	—	内外面に黒釉を単掛け。内底を蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗付。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は灰白色。線彫りで外面に沈線、内面に雲文と沈線。	Ⅸ	SK237 埋土	—
	43	ガラス製品	瓶	—	口～底部	1.9	3.8	8.2	角縁。いかり肩で底形は長方形。色調は半透明のコバルト色。細かい気泡が多くみられる。	Ⅸ	SK238 埋土	—

第９表　遺構出土遺物観察一覧（Ⅸ地区）c

挿図番号 図版番号		種類	器種	分類	部位	法量(cm) 口径(長軸)	底径(短軸)	器高(厚さ)	観察事項	地区	出土地	区画
図版46	44	煙管	—	—	雁首	—	—	—	沖縄産施釉陶器製。火皿径1.4cm、小口径1.5cm、小口内径1.15cm。内外面に灰釉。小口は平坦。素地は灰白色。重量6.51g。	Ⅸ	SK423 埋土	区画33
	45	染付	碗	—	口縁部	—	—	—	外反口縁。素地は淡黄色。外面に文様あり。内外面に細かい貫入がみられる。	Ⅸ	SP0151 埋土	—
	46	沖縄産無釉陶器	皿	初期	底部	—	12.4	—	素地は灰赤色。筋状の白土が含まれる。高台部の接合痕明瞭。	Ⅸ	SP0292 埋土	—
	47	沖縄産施釉陶器	蓋	—	—	—	8.0	—	内外面に黒釉を施釉。高台外面から内底まで露胎。接地面にアルミナを塗付。素地はにぶい赤褐色。	Ⅸ	SP0694 埋土	—
	48	陶質土器	不明	—	口縁部	12.4	—	—	器種不明。口縁部は断面三角形状で、上面観は楕円～方形状を呈する。素地は橙色。胎土に微砂粒が含まれる。	Ⅸ	SP0917 埋土	区画33
	49	ガラス製品	瓶	—	口～底部	1.5	1.35	3.6	底形は円形。底部に◇内に「SY」のエンボス。色調は半透明の茶色。気泡がみられる。	Ⅸ	SP1003 埋土	区画33
	50	ガラス製品	瓶	—	口～底部	6.8	6.7	6.0	底形は円形。底部に「NOX」、「CMA」、「5」のエンボス。色調は半透明のコバルト色。鉄製の蓋が付着。	Ⅸ	SX013 埋土	—
図版47	51	円盤状製品	—	—	—	8.8	8.6	0.9	素材は沖縄産無釉陶器。重量116.47g。	Ⅸ	SX014 埋土	—
	52	沖縄産無釉陶器	壺	—	口～底部	12.4	12.7	32.2	素地は暗赤褐色。外面頸部下部に2条の沈線、その下部に「六」の字状の線刻がみられる。	Ⅸ	SX019 埋土d009	—
	53	沖縄産無釉陶器	壺	—	口～底部	11.8	14.3	39.6	素地はにぶい赤褐色。外面口縁部下部及び胴上部に沈線。外面に漆喰が付着。	Ⅸ	SX019 埋土d010	—
	54	ガラス製品	蓋	—	—	8.0	6.4	6.2	形状は円形。撮みに花形の浮彫。内面に「MADE IN JAPAN」のエンボス。色調は透明。	Ⅸ	SX019 埋土d010	—
	55	煙管	—	—	吸口	1.85	—	—	沖縄産施釉陶器製。小口径1.2cm、口付径0.7cm。内外面に白釉。小口は平坦。素地は灰白色。重量4.47g。	Ⅸ	SX023 埋土	—
	56	煙管	—	—	吸口	1.9	—	—	沖縄産施釉陶器製。小口径1.3cm、口付径0.65cm。外面に灰釉。小口は平坦。素地は白色。重量4.00g。	Ⅸ	SX023 埋土	—
	57	青銅製品	簪	—	—	13.5	—	—	ジーファー。匙状。カブ厚2mm、カブ長18.8mm、頸長21.8mm、竿長94.0mm。頸断面、竿断面ともに六角形。重量29.88g。	Ⅸ	SX026 埋土	—
	58	本土産近現代磁器	杯	—	口～底部	6.5	3.8	7.2	畳付は露胎。素地は白色で緻密。外底に「岐382」の銘あり。統制磁器。	Ⅸ	SX033 埋土	—
	59	石製品	ヘラ	—	—	11.5	2.3	0.5	全面研磨され、滑らかに仕上がる。重量12.90g。	Ⅸ	SX033 埋土d127	—
	60	骨製品	ヘラ	—	—	12.8	2.6	0.7	全面研磨され、滑らかに仕上がる。重量19.21g。	Ⅸ	SX033 埋土d110	—
	61	青銅製品	蝶番	—	—	—	—	—	平蝶番。軸芯孔径4.3mm。留め用釘孔径4.2mm。重量25.68g。	Ⅸ	SX033 埋土	—
	62	石製品	砥石	—	—	10.2	4.9	2.1	札形砥石。表裏側面に砥面。孔径1.6cm。重量131.26g。石灰岩。	Ⅸ	SX039 埋土	—
	63	沖縄産施釉陶器	碗	—	口縁部	12.6	—	—	内外面に灰釉を単掛け。素地は灰白色。外面に別個体の口縁部片が溶着。	Ⅸ	SX045 埋土	—
	64	染付	碗	—	口～底部	15.6	7.0	6.9	内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付は露胎。素地は白色で緻密。外面に草花文、内底に文様あり。徳化窯産。	Ⅸ	SX048 埋土	—
	65	円盤状製品	—	—	—	2.2	2.2	0.9	素材は沖縄産無釉陶器。重量13.92g。	Ⅸ	SX048 埋土	—
	66	円盤状製品	—	—	—	2.4	2.3	0.5	素材は沖縄産無釉陶器。重量3.95g。	Ⅸ	SX048 埋土	—



第 88 図　近世～近代の遺構 出土遺物 1 (IX地区)



第 89 図　近世～近代の遺構 出土遺物 2 (IX地区)

図版 45　近世～近代の遺構 出土遺物 1 (IX地区)

図版 46　近世～近代の遺構 出土遺物 2 (IX地区)

図版 47　近世～近代の遺構 出土遺物 3 (IX地区)

第２項　包含層（Ⅱ層）出土遺物

包含層（Ⅱ層）はⅦ～Ⅸ地区にて確認されており、総計 4,572 点の遺物が出土した。内訳をみると、中国・タイ・本土産陶磁器、沖縄産陶器、土器、石器、石製品、銭貨、青銅製品、鉄製品、瓦、ガラス製品等が出土しており、最も多いのは沖縄産陶器である。中でも第 90 図２の白磁は、いわゆる安平壺と称される 17 世紀代の中国産の壺で、首里城などで出土例がみられる。陶磁器に関しては、近世～近代のものが主体である。そのうち、９点について図化し、個々の所見を第 10 表の観察表にまとめた。なお、遺物点数については、地区別にまとめた集計表（第 18 ～ 20 表）を付属の CD-ROM 内に所収した。

第 10 表　包含層（Ⅱ層）出土遺物観察一覧（Ⅶ・Ⅸ地区）

挿図番号 図版番号		種類	器種	分類	部位	法量(cm) 口径(長軸)	底径(短軸)	器高(厚さ)	観察事項	地区	出土地
第90図 図版48	1	瓦質土器	不明	—	口縁部	22.0	—	—	肥厚口縁。胎土は灰色。光沢のある白色粒を多く含む。	Ⅶ	Ⅱ層
	2	白磁	壺	—	底部	—	6.2	—	高台から外底にかけて露胎。素地は灰白色で緻密。内外面に貫入がみられる。	Ⅸ	Ⅱ層 d138
図版48	3	沖縄産施釉陶器	鉢	—	口～底部	17.4	3.5	6.5	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗付。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は明黄褐色。口縁部に呉須、内面に草花文。	Ⅶ	Ⅱ層
	4	石製品	硯	—	—	16.45	7.5	1.6	陸部中央で凹む。硯背に抉りあり。表裏面及び側面に線条痕。重量342.39g。赤間関産か。	Ⅶ	Ⅱ層
	5	煙管	—	—	雁首	—	—	—	沖縄産施釉陶器製。小口径1.4cm。外面及び火皿内面に白化粧＋透明釉を単掛け。素地は灰白色。重量6.5g。	Ⅶ	Ⅱ層
	6	煙管	—	—	雁首	—	—	—	沖縄産施釉陶器製。小口径1.3cm。外面及び火皿内面に瑠璃釉を施釉。素地は白色。重量4.9g。	Ⅶ	Ⅱ層
	7	青銅製品	計り	—	—	38.2	—	—	竿秤。外面に目盛りの列点。径1.3cm。重量154.3g。	Ⅶ	Ⅱ層
	8	沖縄産施釉陶器	碗	—	—	12.6	5.0	5.5	内外面に白化粧＋透明釉を単掛け。内底は蛇の目状に釉剥ぎ。畳付にアルミナを塗付。内底に目跡あり(アルミナ付着)。素地は灰白色。内外面に呉須で文様あり。	Ⅸ	Ⅱ層
	9	石器	砥石	—	—	23.3	6.9	6.5	角柱形で使用により長軸楔状となる。表面、側面に使用痕。重量1729.68g。流紋岩。	Ⅸ	Ⅱ層 d005

第 90 図　包含層（Ⅱ層）出土遺物

図版 48　包含層（II層）出土遺物（VII・VIII・IX地区）

第５章　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

海軍病院建設予定地は、沖縄県宜野湾市に所在し、アメリカ海兵隊普天間航空基地 (以下、普天間基地) 内に立地する。普天間基地は、琉球層群からなる更新世の段丘面上に位置する。宜野湾市域では、更新世の段丘面が中位段丘上位面 (標高 90m 以上)、下位面 (50 ～ 90m)、低位段丘上位面 (30 ～ 40m)、下位面 (10 ～ 30m) の 4 面に区分されている (上原 ,2000)。

本報告では、海軍病院Ⅶ～Ⅸ地区 (平成 22･23 年度調査区) に於いて検出された遺物や遺構を対象に、遺跡の評価を行う上での情報を得ることを目的に、自然科学分析を実施する。

Ⅰ. 遺構土壌分析

1. 試料

分析試料は、Ⅶ地区の SK98、SL2、およびⅨ地区の SP710 の 3 遺構より採取されている。調査所見によると、SK98 は縄文時代 (後・晩期相当)、SL2 は近世～近代、SP710 はグスク時代と想定されている。

試料は、SK98 覆土で地上から約 130cm より採取された焼土 1 点、SL2 の前庭部内土坑で、床面直上の炭化物混じり 10 層より採取された土壌、SL2 窯体の硬化面直上より採取された炭化材混じり土壌、SL2 窯体からブロック状に採取された土壌 (No,1) の 3 点、および SP710 覆土の 1 層より採取された炭化物、SP710 の 2 層より採取された土壌の 2 点である。

これらの土壌、および土壌より抽出された炭化物を対象に、遺構の年代観を明らかにするために放射性炭素年代測定 3 点を、遺構の内容物を明らかにするために微細物分析 3 点を、古環境を明らかにするために花粉分析 2 点、植物珪酸体分析 2 点を、窯の燃料材を明らかにするために炭化材同定 1 点、灰像分析 1 点を、窯の焼成温度を明らかにするために土壌薄片作成鑑定 1 点を、それぞれ実施する。各試料の詳細は、結果と併せて示す。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

分析試料は AMS 法で実施する。試料表面の汚れや付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。次に塩酸や水酸化ナトリウムを用いて、試料内部の汚染物質を化学的に除去する (酸―アルカリ―酸処理：AAA)。その後超純水で中性になるまで洗浄し、乾燥させる。なお、アルカリ処理は、0.001M ～ 1M まで濃度を上げ、試料の様子をみながら処理を進める。1M の水酸化ナトリウムで処理が可能であった場合は AAA と記す。一方、試料が脆弱で 1M の水酸化ナトリウムでは試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度の水酸化ナトリウムの状態で処理を終える。その場合は AaA と記す。

精製された試料を燃焼して CO_2 発生させ、真空ラインで精製する。鉄を触媒とし、水素で還元してグラファイトを生成する。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした ^{14}C-AMS 専用装置を用いて、^{14}C の計数、^{13}C 濃度 ($^{13}C/^{12}C$)、^{14}C 濃度 ($^{14}C/^{12}C$) を測定する。AMS 測定時に、標準試料とバックグラウンド試料の測定も行う。

$\delta^{13}C$ は試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}C/^{12}C$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差 (‰) で表したものである。

放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代 (BP) であり、誤差は標準偏差 (One Sigma;68%) に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う (Stuiver and Polach,1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。

暦年較正に用いるソフトウエアは、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0、較正曲線は Intcal13(Reimer et al.,2013) である。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正のもとになる直線は暦時代がわかっている遺物や年輪 (年輪は細胞壁のみなので、形成当時の ^{14}C 年代を反映している) 等を用いて作られており、最新のものは 2013 年に発表された Intcal13(Reimer et al.,2013) である。また、較正年代を求めるソフトウエアはいくつか公開されているが、今回は CALIB を用いる。なお、年代測定値に関しては、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるのが普通であるが (Stuiver and Polach,1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウエアの更新に伴う再計算ができるようにするため、表には丸めない値 (1 年単位) を記す。また、中央値は、確率分布の面積が二分される値を年代値に換算したものである。

(2) 微細物分析

土壌試料から炭化物や骨貝類等の遺物を可能な限り壊さずに回収するために、以下の方法を実施する。

1) 水洗前抽出

試料を常温乾燥後、肉眼観察で確認された炭化種実や炭化材、骨貝類等の遺物を抽出する。

2) 水洗

水を満たした容器に乾燥後の試料を入れ、容器を傾けて浮いた炭化物を粒径 0.5mm の篩に回収する。容器内の残土に水を入れて軽く攪拌し、容器を傾けて炭化物を回収する作業を炭化物が浮かなくなるまで繰り返す (20 回程度)。残土を粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。篩に回収された炭化物主体の試料と、0.5mm 篩水洗後の残土 (砂礫主体) を、それぞれ粒径 4mm、2mm、1mm の篩を通し、粒径別に常温乾燥させる。

3) 抽出

水洗乾燥後、粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な炭化種実や炭化材 (主に径 2mm 以上)、骨貝類等の遺物を抽出する。抽出物は、個数または重量、一部は最大径を計測し、結果を一覧表で示す。分析残渣は、炭化材主体と砂礫主体に大まかに分け、粒径別の重量を計測し、結果を一覧表に併記する。分析後は、抽出物と分析残渣を容器に入れて保管する。

4) 種実同定

炭化種実の同定は、現生標本および中山ほか (2010) 等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を一覧表で示す。分析後は、炭化種実を容器に入れて保管する。

(3) 花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛，比重 2.3) による有機

物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス (無水酢酸 9：濃硫酸 1 の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定･計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉 (1973)、中村 (1980)、三好ほか (2011) 等を参考にする。

(4) 植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム, 比重 2.5) の順に物理･化学処理を行い、植物珪酸体を分離･濃集する。これをカバーガラス上に滴下･乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し､その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下、短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ) を、近藤 (2010) の分類を参考に同定し、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土 1g あたりの植物珪酸体含量 (同定した数を乾土 1g あたりの個数に換算) を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100 個 /g 未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は 10 の位で丸め (100 単位にする)､合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。

(5) 炭化材同定

試料を自然乾燥させた後、組織の見える割断面を作成する。実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本と比較して種類 (分類群) を同定する。

(6) 灰像分析

湿重約 5g の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム, 比重 2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下､短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)、およびこれらを含む珪化組織片を近藤 (2010) の分類を参考に同定し、計数する。結果は、検出された分類群とその産状の一覧表で示す。

(7) 土壌薄片作成鑑定

薄片観察は、試料を 0.03 mmの厚さに研磨して薄片にし、顕微鏡下で観察すると、構成する鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質･組織などが観察できるようになるということを利用している。

薄片を作成するために試料をダイヤモンドカッターにより 22 × 30 × 15mm の直方体に切断して薄片用のチップとする。そのチップをプレパラートに貼り付け、＃ 180 ～ #800 の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ 0.1mm 以下まで研磨する。さらに、メノウ板上で＃ 2500 の研磨剤を用いて正確に 0.03mm の厚さに調整する。プレパラート上で薄くなった薄膜状の試料の上にカバーガラスを貼り付け観察用の薄片とする。薄片は偏光顕微鏡下において観察する。

3．結果

(1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果を第 11 表に、暦年較正結果を第 12 表に示す。試料の測定年代 (補正年代) は、Ⅶ地区の SK98 焼土が 1,090 ± 20BP、Ⅶ地区の SL2 窯体 硬化面直上が 170 ± 20BP、Ⅸ地区の SP710 1 層が 890 ± 20BP の値を示す。

第 11 表　放射性炭素年代測定結果

遺構名	試料名	種類	処理	補正年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	測定年代 BP	Code No.
Ⅶ地区SK98	焼土	炭化物	AaA	1,090±20	−13.89±0.61	910±20	IAAA−152093
Ⅶ地区SL2	窯体 硬化面直上	炭化物	AaA	170±20	−10.67±0.67	Modern	IAAA−152094
Ⅸ地区SP710	1層	炭化物	AaA	890±20	−25.23±0.49	900±20	IAAA−152095

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
2)BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
4)AAAは酸－アルカリ－酸処理、AaAはアルカリの濃度を薄くした処理を示す。

第 12 表　暦年較正結果

試料名	補正年代 (BP)	暦年較正年代			相対比	中央値	Code No.
			年代値				
Ⅶ地区 SK98 焼土	1,091±24	σ	cal AD 900 − cal AD 921	cal BP 1,050 − 1,029	0.347	calAD 953	IAAA−152093
			cal AD 950 − cal AD 988	cal BP 1,000 − 962	0.653		
		2σ	cal AD 893 − cal AD 997	cal BP 1,057 − 953	0.981		
			cal AD 1,006 − cal AD 1,011	cal BP 944 − 939	0.019		
Ⅶ地区 SL2 窯体 硬化面 直上	169±22	σ	cal AD 1,669 − cal AD 1,683	cal BP 281 − 267	0.170	calAD 1,765	IAAA−152094
			cal AD 1,735 − cal AD 1,780	cal BP 215 − 170	0.601		
			cal AD 1,798 − cal AD 1,805	cal BP 152 − 145	0.091		
			cal AD 1,933 − cal AD 1,944	cal BP 17 − 6	0.138		
		2σ	cal AD 1,664 − cal AD 1,694	cal BP 286 − 256	0.184		
			cal AD 1,726 − cal AD 1,813	cal BP 224 − 137	0.605		
			cal AD 1,839 − cal AD 1,841	cal BP 111 − 109	0.003		
			cal AD 1,853 − cal AD 1,858	cal BP 97 − 92	0.005		
			cal AD 1,862 − cal AD 1,866	cal BP 88 − 84	0.005		
			cal AD 1,918 − cal AD 1,950+	cal BP 32 − 0	0.197		
Ⅸ地区 SP710 1層	891±23	σ	cal AD 1,051 − cal AD 1,082	cal BP 899 − 868	0.401	calAD 1,144	IAAA−152095
			cal AD 1,128 − cal AD 1,134	cal BP 822 − 816	0.053		
			cal AD 1,151 − cal AD 1,190	cal BP 799 − 760	0.520		
			cal AD 1,199 − cal AD 1,202	cal BP 751 − 748	0.026		
		2σ	cal AD 1,044 − cal AD 1,100	cal BP 906 − 850	0.371		
			cal AD 1,119 − cal AD 1,143	cal BP 831 − 807	0.111		
			cal AD 1,146 − cal AD 1,214	cal BP 804 − 736	0.517		

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1.0(Copyright 1986-2015 M Stuiver and PJ Reimer)を使用。

2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。
3)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
4)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。
5)相対比は、σ、2σのそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。
6)中央値は、確率分布図の面積が二分される値を年代値に換算したもの。

測定誤差を 2 σとして計算させた結果、SK98 焼土は calAD 893 ～ 1,011、SL2 窯体硬化面直上は calAD 1,664 ～ 1,950(以降)、SP710 の 1 層は calAD 1,044 ～ 1,214 である。暦年較正の中央値は SK98 焼土が calAD 953、SL2 窯体 硬化面直上が calAD 1,765、SP710 の 1 層が calAD 1,144 である。

(2) 微細物分析

結果を第 13 表に示す。3 試料計 3,450g より、炭化種実 4 分類群 (イネ、コムギ、イシミカワ近似種、シマキケマン)36 個、炭化材 0.2 g、巻貝類 5 個、貝類 2 個、骨片 1 個が検出された。以下、試料別出土状況を述べる。

第 13 表　微細物分析結果

分類群・部位		状態	Ⅶ地区 SK98 焼土	Ⅶ地区 SL2 前庭部内土坑	Ⅸ地区 SP710 2層	備考
炭化種実						
イネ	穎(基部)	破片	−	−	1	(個)
コムギ	胚乳	破片	1	−	−	(個)
コムギ?	胚乳	破片	1	−	−	(個),腹面
イシミカワ近似種	果実	完形	1	−	−	(個)
		破片	29	−	−	(個)
シマキケマン	種子	完形	1	−	−	(個)
		破片	2	−	−	(個)
不明炭化物			2	3	−	(個)
炭化材			7.7	6.0	3.1	最大径(mm)
炭化材主体		>4mm	0.04	0.03	−	乾重(g)
		4−2mm	0.05	0.07	0.00	乾重(g)
		2−1mm	0.07	0.09	−	乾重(g)
		1−0.5mm	0.17	0.36	0.00	乾重(g)
骨貝類						
巻貝類		完形	−	3	−	(個)
		破片	−	2	−	(個)
貝類		破片	−	2	−	(個)
骨片		破片	−	1	−	(個),長径7.5mm
砂礫主体		>4mm	1.11	11.14	−	乾重(g)
		4−2mm	0.34	6.41	−	乾重(g)
		2−1mm	1.48	7.10	0.98	乾重(g)
		1−0.5mm	3.79	11.31	1.52	乾重(g)
分析量			1300	1800	350	(g)

・Ⅶ地区の SK98 焼土

試料 1,300g より、炭化種実が 35 個 (栽培種のコムギの胚乳が 1 個、コムギ ? の胚乳が 1 個、草本のイシミカワ近似種の果実が 30 個、シマキケマンの種子が 3 個) と、不明炭化物が 2 個、炭化材が 0.1g(最大 7.7mm) 検出された。分析残渣は、炭化材主体 (2 ～ 0.5mm) が 0.2g、砂礫主体が 6.7g を量る。

・Ⅶ地区の SL2 前庭部内土坑

試料 1,800g より、炭化材が 0.1g(最大 6.0mm) と、不明炭化物が 3 個、巻貝類が 5 個 (完形 3 個、破片 2 個)、貝類の破片が 2 個、骨片が 1 個 (長径 7.5mm) 検出された。分析残渣は、炭化材主体 (2 ～ 0.5mm) が 0.5g 未満、砂礫主体が 36.0g を量り、砂礫類は赤みを帯びた焼土が多く、骨貝類の微細片も含む。

・Ⅸ地区の SP710 2 層

試料 350g より、炭化種実が 1 個 (栽培種のイネ穎 (基部)) と、炭化材が 0.01g 未満 (最大 3.1mm) 検出された。分析残渣は、炭化材主体 (1 ～ 0.5mm) が 0.01g 未満、砂礫主体 (2 ～ 0.5mm) が 2.5g を量る。

(3) 花粉分析

結果を第 14 表に示す。花粉化石産出状況は極めて悪く、Ⅶ地区の SK98 焼土からは木本花粉のマツ属とシダ類胞子のイノモトソウ属が数個、Ⅸ地区の SP710 2 層からは不明シダ類胞子が数個確認されたにとどまる。また、検出された花粉化石やシダ類胞子の保存状態も悪く、外膜が溶解の影響を受けている状況であった。

第 14 表　花粉分析結果

種　類	Ⅶ地区 SK98 焼土	Ⅸ地区 SP710 2層
木本花粉		
マツ属	1	−
シダ類胞子		
イノモトソウ属	5	−
他のシダ類胞子	5	2
合　計		
木本花粉	1	0
草本花粉	0	0
シダ類胞子	10	2
合計	11	2

(4) 植物珪酸体分析

結果を第 15 表に示す。植物珪酸体は検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔 (溶食痕) が認められる。Ⅶ地区の SK98 焼土からは、分類群を特定できない不明がわずかに見られるに過ぎない。含量も少なく、土壌 1g あたり 100 個未満である。

Ⅸ地区の SP710 2 層では、イネ属の機動細胞珪酸体、ススキ属の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体などが見られる。ただし含量は少なく、約 300 個 /g 程度である。また、珪化組織片として栽培植物であるイネ属の籾 (穎) に形成される穎珪酸体も確認された。

(5) 炭化材同定

炭化材の大部分は組織が認められず、いわゆる炭質物の状態である。僅かに組織の残る部分があり、植物由来と思われる組織が認められる。認められた組織は道管と考えられることから、少なくとも針葉樹ではない。観察した範囲では、軸方向組織のみで、放射組織は認められない。硬く炭化している状況から、木質化するタケ亜科、ヤシ類等の可能性があるが、組織配列が認められないため種類は不明である。

第 15 表　植物珪酸体分析・灰像分析結果

(個/g)

分類群	Ⅶ地区 SK98 焼土	Ⅸ地区 SP710 2層	Ⅶ地区 SL2窯体 硬化面直上
イネ科葉部短細胞珪酸体			
ススキ属	−	<100	−
不明	<100	<100	−
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
イネ属	−	100	−
ススキ属	−	<100	−
不明	<100	100	−
合計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	<100	100	−
イネ科葉身機動細胞珪酸体	<100	200	−
植物珪酸体含量	<100	300	−
珪化組織片			
イネ属穎珪酸体	−	*	−
キビ連穎珪酸体	−	−	*
イネ属短細胞列	−	−	**
キビ連短細胞列	−	−	***

1)含量は、10の位で丸めている(100単位にする)。
2)合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。
3)<100: 100個/g未満。
4)−: 未検出, *: 含有, **: 多い, ***: 非常に多い。

(6) 灰像分析

結果を第 15 表に併せて示す。Ⅶ地区の SL2 窯体の硬化面直上からは、珪化組織片としてイネ属短細胞列とともに、キビーヒエーアワの判別がつかないものの、これらの籾 (穎) に形成される穎珪酸体に類似した形態のキビ連穎珪酸体、葉部に形成されるキビ連短細胞列も見られる。この中では、キビ連短細胞列が非常に多く、イネ属短細胞列も多い。

(7) 土壌薄片作成鑑定

偏光顕微鏡下において焼成の状況について観察記載を行った。鏡下における量比は、薄片上の観察面全体に対して、多量 (> 50%)、中量 (20 ～ 50%)、少量 (5 ～ 20%)、微量 (< 5%) およびきわめて微量 (< 1%) という基準で目視により判定した。代表的な個所については下方ポーラーおよび直交ポーラー下において写真撮影を行い、写真図版として添付した。以下に鏡下観察結果を述べる。

・Ⅶ地区 SL2 窯体 (No.1)

本試料は、極細粒砂～中粒砂サイズの砕屑片を中量含む砂混じり粘土である。鉱物片は中量程度認められ、石英が主体となっており、斜長石、カリ長石、白雲母、黒雲母、角閃石、緑簾石、ジルコン、炭酸塩鉱物、不透明鉱物などを伴う。岩片がきわめて微量含まれており、チャート、頁岩、脈石英などが認められる。その他には粒径 1mm 以下の酸化鉄結核もきわめて微量認められる。基質は褐色粘土鉱物、雲母鉱物、石英、水酸化鉄などから主に構成され、褐色～淡赤褐色を示す。

4. 考察

(1) 遺構の年代

各遺構より採取された炭化物について放射性炭素年代測定を実施した結果、Ⅶ地区の SK98 焼土が補正年代で 1,090 ± 20BP、暦年代で calAD 893 ～ 1,011(中央値 :calAD 953)、Ⅶ地区の SL2 窯体 硬化面直上が補正年代で 170 ± 20BP、暦年代で calAD 1,664 ～ 1,950(以降)(中央値 :calAD 1,765)、およびⅨ地区の SP710 1 層が補正年代で 890 ± 20BP、暦年代で calAD 1,044 ～ 1,214(中央値:calAD 1,144) であった。

調査所見によると、SL2 は近世～近代と想定されており、暦年代も 17 世紀後半～現代の値を示す。また、SP710 はグスク時代と想定されており、こちらも暦年代で 11 世紀中頃～ 13 世紀前半を示し、調査所見を支持する結果といえる。

これに対し、SK98 は暦年代で 9 世紀末～ 11 世紀前半の値を示したが、調査所見では縄文時代後・晩期相当と推定されており、分析結果と差が認められた。この点については、遺構の年代が新しい、あるいは新しい時代の炭化物が混入したなどの可能性が想定される。

(2) 遺構の内容物

Ⅶ地区の SK98 焼土と、Ⅶ地区の SL2 前庭部内土坑、Ⅸ地区の SP710 2 層の、計 3 試料を対象とした微細物分析の結果、炭化種実、炭化材、巻貝類、骨片などの遺物が検出された。炭化種実のうち栽培種では、イネ、コムギが確認された。SP710 より穎が確認されたイネと、SK98 より胚乳が確認されたコムギは、当時利用された植物質食糧と示唆され、火を受けたとみなされる。イネ、コムギ等の炭化穀粒は、本遺跡周辺域に分布する多くのグスク時代以降の遺跡からも確認されている。なお、SP710 の 2 層からは、イネ属の籾 (穎) に形成される穎珪酸体が検出される。前述のように同試料からイネの穎が認められることから、検出された穎珪酸体もその一部に由来するものと思われる。

また、検出された巻貝類、骨片などは、SL2 前庭部内土坑に集中する。これらは、何らかの利用をされた後、一箇所に廃棄された可能性がある。

(3) 古植生

Ⅶ地区の SK98 焼土、Ⅸ地区の SP710 2 層から検出された植物化石のうち、周辺の古植生を反映するものについてみると、花粉化石ではマツ属とシダ類胞子が、植物珪酸体ではススキ属が、種実遺体ではイシミカワ近似種の果実、シマキケマンの種子が確認された。

マツ属は海岸～山地部まで生育する常緑高木で、沖縄ではリュウキュウマツが一般的である。ススキ属は林縁林床や道端などに、イシミカワは道端や河原の砂地等に、シマキケマンは海岸の砂泥地等に、それぞれ生育する草本である。イノモトソウ属は、林内や暗い斜面地などの普通に生育するシダである。よって、これらが調査区周辺域の森林や草地環境に生育していたと考えられる。

(4) 窯の燃料材

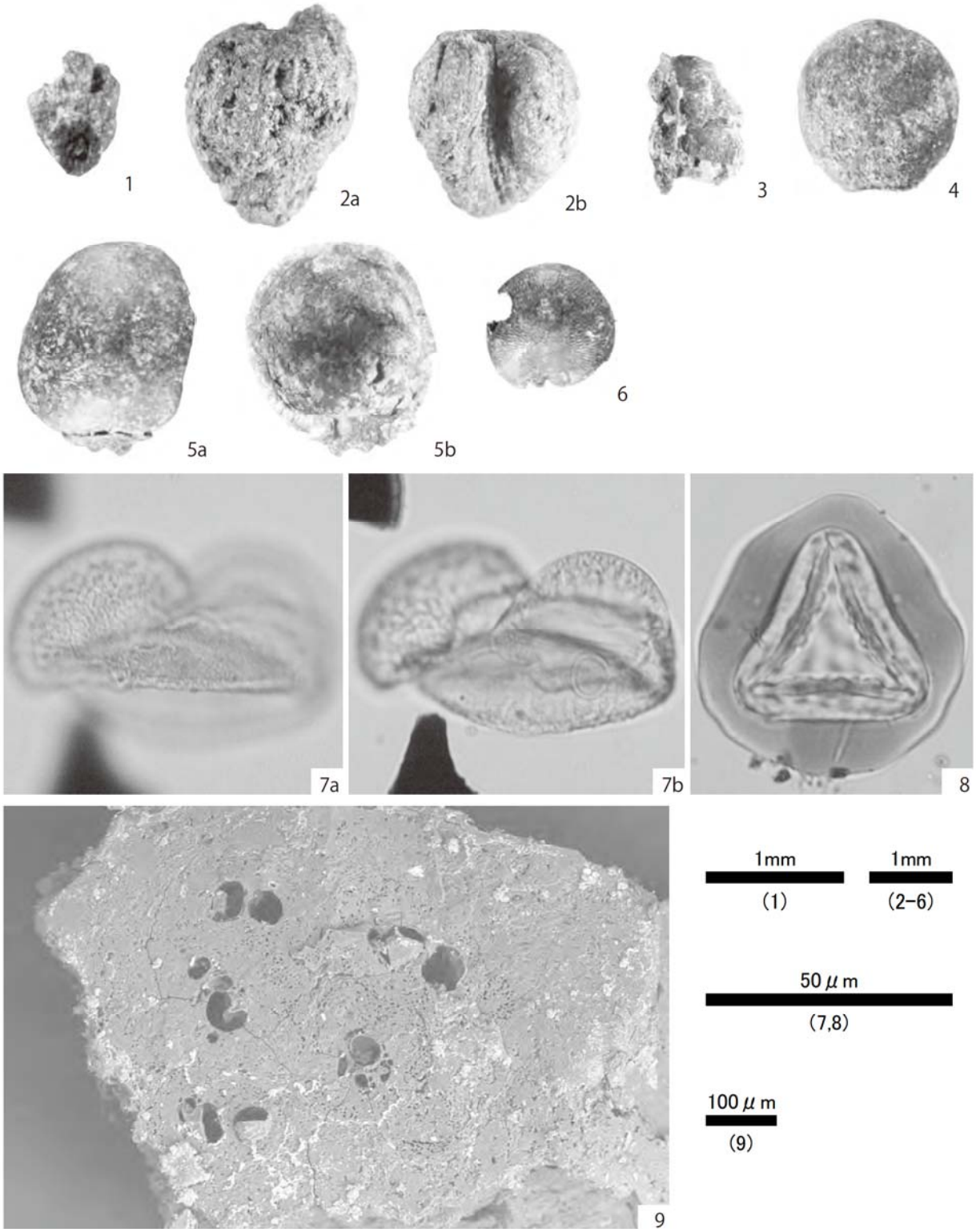
Ⅶ地区の SL2 窯体 硬化面直上から出土した炭化材は、大部分が組織を持たない炭質物である。その中に、僅かに植物組織を持つ炭化材が含まれており、観察できた組織の特徴等からタケ亜科やヤシ類等の可能性が考えられる。沖縄本島に分布するタケ亜科としては、稈 (竹の幹) が密生して生えるバンブー類に含まれるホウライチク属のホウライチク、生長しても稈鞘が宿存するササ類に含まれるメダケ属のリュウキュウチクが分布する。また、ヤシ類ではビロウが分布している。この他、海岸付近に広く生育するアダンもヤシ類に似て、放射組織を持たない。これらの放射組織を持たないが、木質化する種類が窯内に存在した可能性がある。

一方、灰像分析の結果をみると SL2 窯体の硬化面直上からは、珪化組織片としてイネ属短細胞列、キビ連穎珪酸体、キビ連短細胞列が見られた。この産状からは、イネ属の葉部 (いわゆる稲藁) やキビ連の植物体が試料中に混在していたことが推定され、燃料材のひとつとしてこれらの利用が示唆される。この中ではキビ連短細胞列が非常に多く、イネ属短細胞列も多かったことから、利用されたイネ科草本類の中ではキビ連の植物体が多く、次いで稲藁だった可能性がある。稲藁は、コメの収穫後に容易に入手できる材料であり、また古くから燃料材や住居構築材などの生活資材に利用されることが多い。また、キビ連には栽培種 (キビ、ヒエ、アワ) のほか、いわゆる雑草とされるヌカキビ、タイヌビエ、エノコログサなども含まれる。いずれも集落周辺に生育し、容易に入手できる。ただし、これらの植物体は燃焼しやすいものの、火力が弱く、継続時間も短い。そのため、主たる燃料ではな

く、薪炭材への焚き付け材などに利用されたと考えられる。
なお、前述のようにキビ連には栽培種が含まれることから、微細物分析などを追加することにより、栽培植物利用に関するさらなる情報が得られるかもしれないことを、付け加えておく。
(5) 窯の焼成温度
Ⅶ地区の SL2 窯体 (No.1) は、極細粒砂～中粒砂サイズの砕屑片を中量含む砂混じり粘土であった。基質に分布する酸化鉄結核、水酸化鉄、黒雲母、褐色粘土鉱物は褐色を呈するが、赤みの強い色調を示している。赤みが増しているこれらの構成物は、すべて鉄分を含んでいることから、赤みが強くなる現象は、水酸化鉄や、各鉱物中の鉄分が焼成により赤鉄鉱化したことによる変化と捉えることができる。水酸化鉄は、普通 270 ～ 325℃程度の焼成を受けると脱水し、赤鉄鉱へ変化することが知られている (吉木 ,1959)。これを考慮すると、本試料も 270 ～ 325℃程度の温度で焼成されたと推測することが可能である。また、赤みを増している部分は、土壌表面から数 cm の深度まで達している。1 ～ 2 時間程度の焼成ではここまで深く反応しないことから、一回当たりの焼成に長い時間を掛けていた可能性が示唆され、窯としての利用を支持する結果といえる。

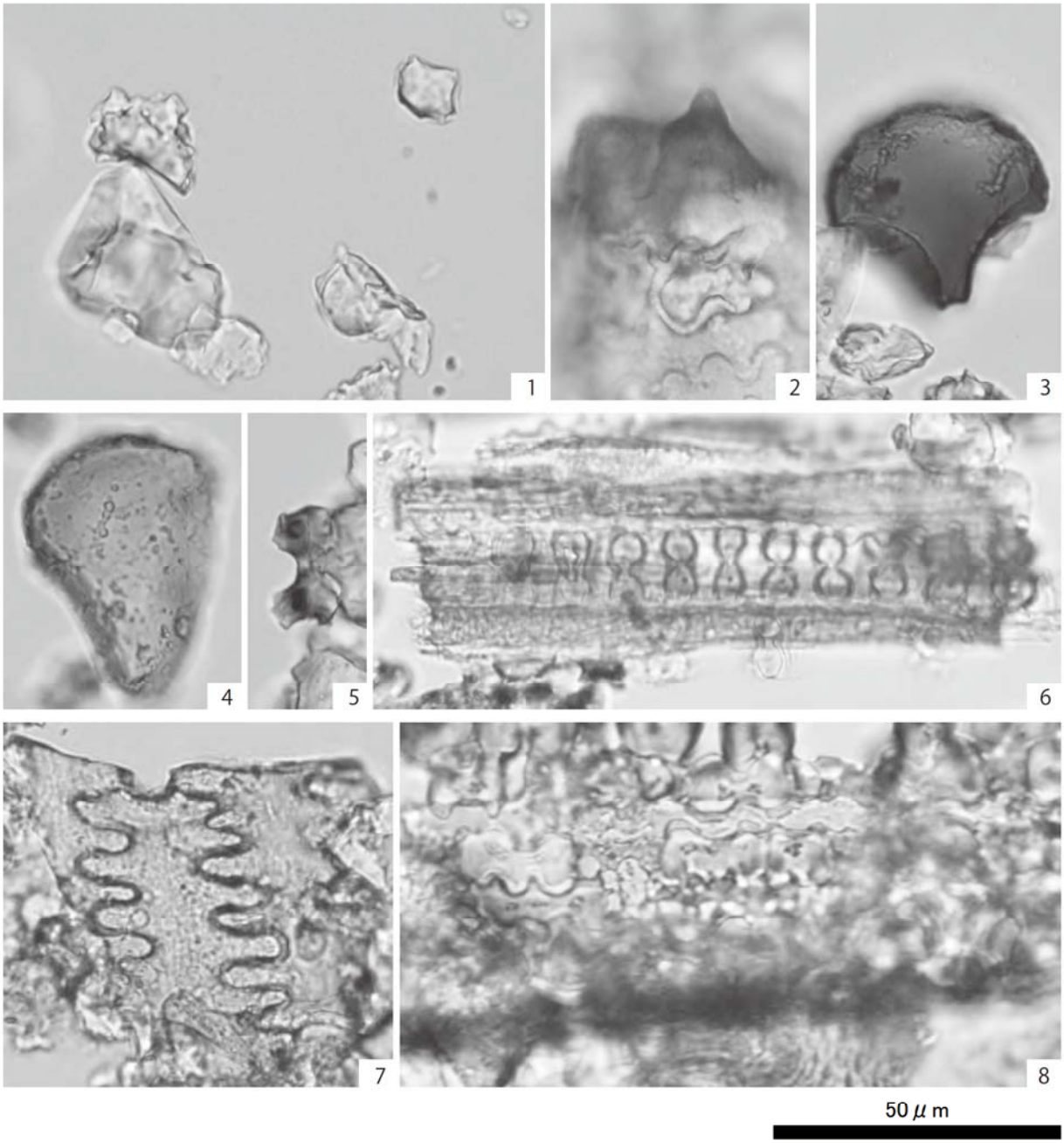
引用文献

五十嵐俊雄 ,2006, 考古資料の岩石学 . パリノ・サーヴェイ株式会社 ,194p.
木崎甲子郎編著 ,1985, 琉球弧の地質誌 . 沖縄タイムス社 ,278p.
近藤錬三 ,2010, プラント・オパール図譜 . 北海道大学出版会 ,387p.
三好教夫・藤木利之・木村裕子 ,2011, 日本産花粉図鑑 . 北海道大学出版会 ,824p.
中村　純 ,1980, 日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ (図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第 12,13 集 ,91p.
中山至大・井之口希秀・南谷忠志 ,2010, 日本植物種子図鑑 (2010 年改訂版). 東北大学出版会 ,678p.
Reimer J Paula • Bard Edouard • Bayliss Alex •Beck J Warren • Blackwell G Paul • Ramsey Bronk Christopher • Buck E Caitlin • Cheng Hai • Edwards R Lawrence • Friedrich Michael • Grootes M Pieter • Guilderson P Thomas • Haflidason Haflidi • Hajdas Irka • Hatté Christine • Heaton J Timothy • Hoffmann Dirk L • Hogg G Alan • Hughen A Konrad • Kaiser K Felix • Kromer Bernd • Manning W Sturt • Niu Mu • Reimer W Ron • Richards A David • Scott E Marian • Southon R John • Staff A Richard • Turney S M Christian • Plicht van der Johannes,2013,Intcal13 and Marine13 Radiocarbon age Calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon,55,1869–1887.
島倉巳三郎 ,1973, 日本植物の花粉形態 . 大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第 5 集 ,60p.
Stuiver Minze and Polach A Henry,1977, Radiocarbon 1977 Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon ,19, 355-363.
上原冨士男 ,2000, 宜野湾市の地形・地質・水 . 宜野湾市史　第 9 巻　資料編 8　自然 .55-124.
氏家　宏・兼子尚知 ,2006, 那覇及び沖縄市南部地域の地質 . 地域地質研究報告 (5 万分の 1 図幅). 産総研地質調査総合センター ,48p.



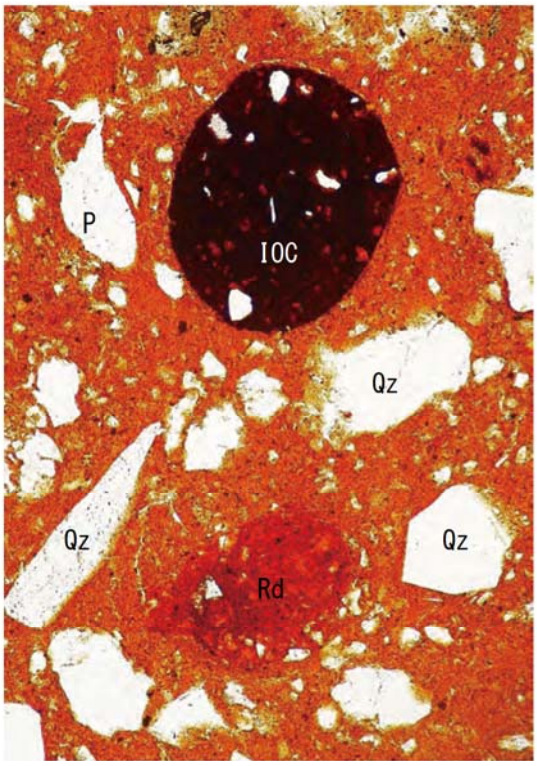
1．イネ 穎(基部)(Ⅸ地区SP710;2層)
2．コムギ 胚乳(Ⅶ地区SK98;焼土)
3．コムギ? 胚乳(Ⅶ地区SK98;焼土)
4．イシミカワ近似種 果実(Ⅶ地区SK98;焼土)
5．イシミカワ近似種 果実(Ⅶ地区SK98;焼土)
6．シマキケマン 種子(Ⅶ地区SK98;焼土)
7．マツ属(Ⅶ地区SK98;焼土)
8．イノモトソウ属(Ⅶ地区SK98;焼土)
9．種類不明 横断面(Ⅶ地区SL2;窯体 硬化面直上)

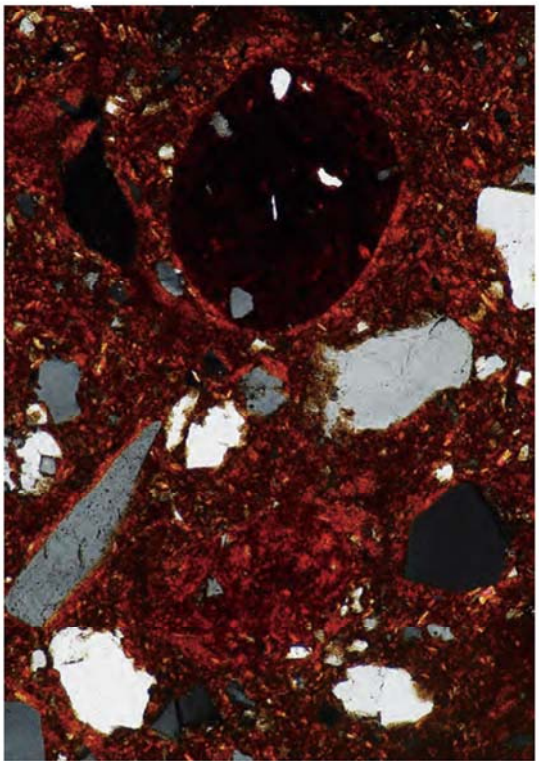
図版 49　炭素種実・花粉化石・シダ類胞子・炭化材



1．状況(鉱物粒子が散在)(Ⅶ地区SK98;焼土)
2．イネ属穎珪酸体(Ⅸ地区SP710;2層)
3．イネ属機動細胞珪酸体(Ⅸ地区SP710;2層)
4．ススキ属機動細胞珪酸体(Ⅸ地区SP710;2層)
5．ススキ属短細胞珪酸体(Ⅸ地区SP710;2層)
6．イネ属短細胞列(Ⅶ地区SL2;窯体 硬化面直上)
7．キビ連穎珪酸体(Ⅶ地区SL2;窯体 硬化面直上)
8．キビ連短細胞珪酸列(Ⅶ地区SL2;窯体 硬化面直上)

図版 50　植物珪酸体





Ⅶ地区 SL2　窯体（No.1）

下方ポーラー　　直交ポーラー

IOC:酸化鉄結核. Qz:石英. P:孔隙. Rd:赤褐色化した基質.

0.5mm

図版 51　窯体薄片

第６章　総括

平成 22 ～ 23 年度に実施した普天間古集落遺跡の発掘調査は米海軍病院建設に伴うものである。その成果については前章までにまとめたが、本章では当該遺跡の立地や各時代の遺構・遺物について再整理を行い、総括とする。

遺跡の立地

普天間古集落遺跡は標高 50 ～ 90m の段丘上に位置し、基盤層の大半は琉球石灰岩層から成る。この琉球石灰岩の段丘縁には洞穴と湧泉が点在している。本遺跡は標高約 55m の段丘上に展開している。

時代を遡ると、まず縄文時代の後期から晩期にかけて生活空間が形成され、その後 11 ～ 13 世紀頃のグスク時代に生活空間が形成されるようになる。当該遺跡では埋没谷内黒色層が確認されており、かつて遺跡一部には谷状の地形があったことが想定されている。この埋没谷内黒色層が堆積した時期については不明であるが、当該層における植物珪酸体分析ではイネ属の機動細胞珪酸体がわずかに見られ、この層位が稲作に関連する層であった可能性が報告されていることから、グスク時代以後の農耕に関連する堆積層の可能性もある。13 世紀前半以後は人々の生活の痕跡は一旦途絶えるが、近世～近代には普天間古集落の形成とともに、集落の一部は耕作地して利用され、沖縄戦以後は米軍基地へ接収されていった。

縄文時代

縄文時代の遺構は、Ⅶ～Ⅸ地区の各地区にて土坑が検出されている。

土坑は深さ１m 以上掘り込まれており、中には深さが２m 以上掘り込まれるものも確認されている。Ⅶ地区からは９基、Ⅷ地区からは３基、Ⅸ地区からは９基が確認されている。遺物を伴うものも複数確認されており、縄文時代後期～晩期の土器片や石器が出土している。土坑は全体的に点在して検出されており、性格については落し穴としての可能性が考えられる。今回、このような土坑の年代観を明らかにする目的で、Ⅶ地区の SK098 の埋土中で検出された焼土片について放射性炭素年代測定を実施した。その結果、暦年代で９世紀末～ 11 世紀前半の値が得られた。調査所見では、従来の調査での類例より縄文時代後～晩期相当を想定していたため、年代観に大きな差異が生じた。この結果について検証すると、SK098 内から採取した焼土片は、地表面より約 110cm 下の埋土中で検出された焼土片である。本遺構の掘り込みは最大 170cm 下の岩盤まで達しており、焼土片は遺構内に約 60cm 程度埋土が堆積した状態で埋まったものと推察される。その時期が９世紀末～ 11 世紀前半以降と考えられる。なお、本遺構の埋土中からは、縄文時代晩期相当の土器やくびれ平底を呈する貝塚後期相当の土器片も１点出土しており、遺物の出土状況からも後世の遺物が入り込んでいる様相がうかがえる。これらの状況を整理すると、本遺構が掘り込まれた時期は９世紀末～ 11 世紀前半よりも古い段階であり、その時期についてはこれまでの類例遺構や出土遺物より縄文時代晩期頃と判断される。

その他の土坑のうち、Ⅷ地区で確認された SK183 については、201 点の土器片が出土する等、他の土坑と比べて土器の出土量が多いという特徴がみられる。土器は仲原式土器など、縄文時代晩期を主体する。土器片を多く伴う遺構としては、これまでにⅠ地区やⅡ地区にて竪穴状の遺構が確認されている（Ⅰ地区の SK19、Ⅱ地区の SI １）。ともに縄文時代晩期の宇佐浜式～仲原式土器が出土しており、今回確認された SK183 と時期的には重なる。今回確認された SK183 は、後世の溝に削平を受

けて詳細は不明であるが、従来確認された竪穴状の遺構との比較検討が必要であり、今後の課題とする。

遺物は土器、石器、石材が出土している。土器は縄文時代後期～晩期の点刻線文系土器、肥厚口縁系土器、有段・外耳付土器が出土している。縄文時代晩期の宇佐浜式、仲原式土器が主体的となる。器種は深鉢形と壺形がある。石器の種類は石斧、磨石、砥石などである。また、近世～近代の遺構や包含層であるⅡ層からも土器や磨製石斧などが出土している。

グスク時代

グスク時代の遺構は、Ⅶ～Ⅸ地区で確認されており、掘立柱建物跡、ピットがある。掘立柱建物跡は８棟確認され、母屋（主屋）が４棟、高床倉庫跡が４棟見つかっている。母屋（主屋）には中柱を有するプランが確認され、高床倉庫跡は６本柱と９本柱のプランが確認された。掘立柱建物１～５、７については長軸が北西－南東方向、あるいは東西方向を向き、掘立柱建物６、８については長軸が北東－南西方向を向いている。これらのうち、仲宗根氏によって提唱された「吹出原型掘立柱建物」（仲宗根 2003）の建物配置が見出せるものが複数確認され、掘立柱建物跡１及び２と、掘立柱建物跡４及び５についてセット関係が想定される。掘立柱建物跡１が母屋（主屋）、掘立柱建物跡２が付随建物（高床倉庫跡）、双方の建物間の距離は約 14.5m、そして掘立柱建物跡４が母屋（主屋）、掘立柱建物跡５が付随建物（高床倉庫跡）、双方の建物間の距離は約 15m である。この他、９本柱の掘立柱建物跡６は、普天間古集落遺跡では初めて確認された。前回までの調査では、４本柱及び６本柱が確認されていたが、今回の調査によって９本柱のプランも存在することが判明した。

建物の時期については、掘立柱建物跡１～３からグスク土器の胴部片が出土している。中でも掘立柱建物跡３の SP052 からは口縁部に縦耳をもつ鍋形のグスク土器が出土している（第 33 図３）。また、掘立柱建物跡４の中柱にあたる SP710 内の炭化物について放射性炭素年代測定を実施した結果、補正年代で 890 ± 20BP、暦年代で calAD1,044 ～ 1,214 と 11 世紀中頃～ 13 世紀前半の値が得られている。

その他、同柱穴内からはイネ、コムギの炭化種実が確認されており、本地域においても農耕が営まれていたことが示唆される。

また、遺物はグスク土器、縄文土器、滑石混入土器、中国産白磁、カムィヤキなどが出土している。土器はグスク土器と縄文土器が混在する状況がみられる。グスク土器は、滑石製石鍋模倣土器を主体とし、滑石混入土器もみられる。中でも、Ⅲ層（包含層）から出土した第 35 図１の鍋形の土器は、口縁部形態がくの字状に強く屈曲しており、また胎土に金雲母が混入しているなど、他のグスク土器とは異なる特徴がみられる。中国産白磁は、年代の指標となる白磁玉縁碗（11 ～ 12 世紀代）が主体となっている。カムィヤキは壺が出土している。遺構内とグスク時代の包含層であるⅢ層から出土する他、近世～近代の遺構や包含層のⅡ層からもグスク時代相当の遺物が出土している。

以上、グスク時代の遺構については出土した遺物や遺構の埋土中から抽出された炭化物について放射性炭素年代測定結果を踏まえると、11 世紀中頃～ 13 世紀前半と考えることができる。

近世～近代

近世～近代の遺構は、ピット、土坑、方形石組遺構、井戸、溝跡、道跡、炉跡、窯跡、地下壕等様々な遺構が検出されている。当該時期の遺構が最も多く、本遺跡における主体をなしている。前回までの報告で当該時期における屋敷地や畑等の区画として 25 の区画を想定したが、今回報告するⅦ～Ⅸ地区の調査においても、これらの区画をなす溝跡と軸が同じ方向に伸びるものが複数確認され、従来

の区画と連結する形で新たに９つの区画を想定することができた。その結果、Ⅰ～Ⅸ地区全体で想定される区画の数は 34 となった（第 12 図）。

ピットは数多く検出され、屋敷跡に関係するピットもあると考えられるが、明確な建物プランを把握できたのは、Ⅸ地区で確認された３棟（建物９～ 11）とⅧ地区で確認された１棟（建物 12）である。

建物９は 15-K ６グリッド、建物 10、11 は 15-J･K ７グリッド、建物 12 は 15-H ５グリッドに位置する。いずれも方形のプランで、４本柱の建物である。長軸は北東－南西方向を向く。建物９～ 11 は区画 33 内、建物 12 は区画 34 内で検出されたが、区画の軸とほぼ同じ向きであることより、これらは区画に伴う建物であることが想定される。

土坑は掘方が方形状を呈するもの、擂鉢状を呈するもの、段を持つもの、オーバーハングして掘り込むもの等が確認された。掘方が方形状を呈するものが多い傾向にある。中には溝内に掘り込まれた土坑も多い。これらの土坑は様々な用途が推測できるが、柱の抜け跡と考えられるもの、何らかの作業に使用するための水を溜める溜池跡等々が考えられる。このうち、溜池跡と考えられる遺構には、地山を方形状に掘り込み、海浜のサンゴ砂利と樹液を混ぜ固めて造った桝状の遺構（サントウ技法と称される）がある。セメントが普及する以前の技法とされる。このサントウ技法と類似する遺構に、Ⅶ地区の 15-K11 グリッドで確認された SK170 は、15 ～ 35cm 大の石灰岩を壁面に配置し、その表面にサントウ技法と似た素材を施している。しかし、サントウ技法はサンゴ砂利と樹液を混ぜているが、本遺構ではサンゴ砂利が混じっていない点で異なっている。石組とサントウ技法と同様の技術を用いたこれまで確認されていないタイプの土坑といえる。

また、土抗の中には近現代の本土産陶磁器の碗・皿類や沖縄産陶器の壺、擂鉢、急須等がまとまって出土したものが複数見つかった（Ⅶ地区 15-J11 グリッドの SK204、Ⅸ地区 15-M ７グリッドの SX033）。同様な状況は、喜友名貝塚・喜友名グスクで確認されており、出土状況より戦時中の避難時に家財道具を埋めたものと考えられている。本調査で確認された遺構も、戦時中に家財道具を隠したものと考えられる。興味深いのが、碗・皿類はいずれも近現代の本土産陶磁器（型紙絵付け・銅版転写・吹き絵・ゴム版）で、同じ種類の製品が複数枚揃いでみられる。このうち、戦時中に生産されたことを示す統制番号が入った資料は図版 36 の 141 と図版 47 の 58 がみられるだけで量は少ない。沖縄産陶器は急須や壺類がみられる。これらの陶磁器類の組み合わせからは、当時の食器構成や食生活の一端が窺えるようである。

方形石組遺構は、これまでの調査で確認された方形石組遺構と共通した造りものが確認された。20 ～ 60cm 大の石灰岩の切石を四方に配置し、床面は地山直上に拳大の小礫を敷き、その上にモルタル（又はセメント）を施して構築している。壁面の切石の表面にもモルタルを塗布し、目張りしている。

井戸は 10 基（Ⅶ地区１基、Ⅷ地区４基、Ⅸ地区５基）確認された。井戸の直径は 75 ～ 90cm のものがほとんどで、構築方法は、地山を逆ハの字状又はほぼ垂直に掘り込み、切石を岩盤直上からハの字状に相方積みで積んでいる。切石は 25 ～ 40cm 大と大きい切石を使用するものと、15 ～ 25cm 大の切石を使用するもの（Ⅸ地区 15-M・N ８グリッドの SE002、同 15-L ７・８グリッドの SE005）がみられ、大きい切石を使用する井戸は隙間がみえる等、粗く積まれたものが多く、小さい切石を使用する井戸は、面の加工や積み方が丁寧な造りという傾向がみられた。この違いは構築年代の差なのか、使用場所あるいは使用目的が異なるのか、検討を要する。造りが丁寧な井戸の天端付近には石敷遺構が残存していたことを付記する。

溝跡は、前回同様に屋敷の区画と考えられるものと、排水として使用されたと考えられるものが確認された。これまで、溝内に土坑が掘り込まれているものや、拳大～頭大の石灰岩の礫を詰めてい

るものについては排水等の使用を想定したが、区画としての機能を持つ溝内にも５～15cm 大の石灰岩礫を意図的に置いたと考えられるような状況が確認された（Ⅸ地区区画 33 の SD062、069、070・071）。

道跡は、Ⅰ・Ⅱ地区（平成 20 年度の調査）にて確認された道１の続きがⅨ地区の６地点で検出された（SD047）他、４地区（平成 21 年度の調査）にて確認された道３の続きがⅧ地区の３、５地点で検出された（SD010・019）。

窯跡は７基（Ⅶ地区６基、Ⅸ地区１基）確認され、中でもⅦ地区では５基が隣接して見つかっている。ここでは①平面形、②法量、③構造、④分布に着目して整理する。まず①平面形については、燃焼部は円形又は楕円形、灰原部分は方形状又は不定形状を呈する。②法量については、Ⅶ地区で確認された５基については、全長が 4.5 ～ 5.7m、燃焼部の直径が１～ 1.3m となるのに対し、Ⅸ地区の SL001（15-N ８グリッド）は全長 1.8m、燃焼部の直径 1.4 × 1.25m と小型である。③構造については、Ⅶ地区 SL002、SX004・006 は燃焼部に石灰岩を巡らせる。また、SL002 の灰原部分は５～ 20cm 大の石灰岩礫を壁面の傾斜に沿って配置している。その他、Ⅶ地区 SL001・SX007 と SX004・006 については、周囲を囲い込むようにピットが存在することより、覆屋が存在した可能性も考えられる。④分布をみると、Ⅶ地区の SL001・SX007、SL002、SX004・006 の３基は区画 29 内で検出され、それぞれ隣接する。また、同地区の SL003（旧）と（新）及び、SX021 の３基は区画 30 内での検出である。また、Ⅸ地区の SL001 は５地点 15N- ８グリッドでの検出である。このように複数の窯が隣接している特徴があり、これらの窯跡は普天間古集落遺跡の北西側で多く検出されていることが特徴として挙げられる。遺構の年代については、Ⅶ地区 SL002 内から採取された炭化材について放射性炭素年代測定を実施した結果、補正年代で 170 ± 20BP、暦年代で calAD1,664 ～ 1,950 と 17 世紀後半から現代の値が得られている。また、機能としては製糖に関係する遺構の可能性を考えている。

今回の調査では、地下壕と考えられる遺構も確認された。Ⅷ地区の SX022（15-H ３グリッド）は、北西方向に２つの壕口が設けられ、内部へ向かっては階段状に下がっていく。壕口部の通路幅は 70 ～ 80cm、内部は北東方向へ 4.5m、幅が 1.4m の空間が掘り込まれている。

各遺構の年代については、これまでの調査成果（沖縄県立埋蔵文化財センター 2015a、2015b）では 17 世紀後半から現代に至る年代のうち、主体は 18 世紀以降という年代観を提示した。今回の調査で確認された遺構についても同様の年代観を捉えている。参考までに、Ⅶ地区 SL002（15-I13 グリッド）の燃焼部硬化面（床面）直上で採取された炭化物について放射性炭素年代測定を実施した結果、それぞれ較正された暦年で 17 世紀後半から現代という値が示されていることからも、これまでの調査で確認された遺構と年代観に差異はない。

確認された各遺構の分布状況をみると、区画によって遺構が多く集中する箇所と遺構が少ない箇所があるものの、Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ地区ともに多くの遺構が確認された。昭和 20 年に撮影された航空写真に調査区を重ねると、集落の広がる箇所や耕作地に調査区がまたがっており、遺構密度の高い箇所は集落、遺構密度の低い箇所は耕作地が広がっており、遺構の出方と概ね一致している（図版 53）。ただし、Ⅸ地区で確認された区画 33 に注目すると、昭和 20 年の航空写真では耕作地が広がっているが、発掘調査では、建物跡が３棟の他、ピット、土抗、方形石組遺構等が多くの遺構が見つかっている。出土遺物をみても、区画の中でも多くの遺物が出土している（第 16 表）。これらのことより、当初は人々の居住域であった時期があり、その後戦前まで耕作地へと利用形態が変化したことが考えられる。そこで居住域であった時期について出土遺物から考察する。溝跡以外の区画 33 内の遺構（SK・SP・SX）出土の遺物をみると、沖縄産施釉陶器や沖縄産無釉陶器が主体を占めている。本土産近現代陶磁器は僅かに数点がみられるのみである。その他、中国産陶磁器は徳化窯の白磁や染付がある。

沖縄産施釉陶器について詳細をみていくと、碗が最も多く、中でも灰釉碗が 202 点、黒釉碗が 34 点、白化粧の上から透明釉を施す碗が 10 点と、灰釉碗が主体を占めるのが特徴である。灰釉碗は沖縄で最初に生産された施釉陶器の一つとされ、その製作年代については、同時期にみられる中国産染付の年代や窯詰技法等の比較により、17 世紀前半を上限とする見解や、17 世紀後半～ 18 世紀前半とする見解、17 世紀後半～ 18 世紀後半とする見解が示されている。区画 33 内の遺構出土遺物はその灰釉碗を主体とし、徳化窯産の白磁や染付が共伴することより、古くは 17 世紀後半～ 19 世紀にかけて区画 33 は居住域として使用されていたものと考える。その後は耕作地として戦前まで利用された。区画 33 内の遺構のうち、100 点を越える遺物が出土した SK398 と SK433（ともに 15-K 7 グリッド）における遺物の内訳をみても（第 20 表）、灰釉碗が主体で、その他中国産陶磁器の徳化窯製品や宜興窯製品、本土産陶器（薩摩）が共伴している。他の区画では、沖縄産施釉陶器碗でも、白化粧の上から透明釉を施す製品が主体であり、区画によって、灰釉碗の出土状況に差がみられる。灰釉碗が主体である区画 33 は普天間古集落遺跡の中でも古期の様相を示すと考えられ、注目される。

当該時期の遺物については、沖縄産陶器を中心に、本土産陶磁器、中国産陶磁器、金属製品、瓦等が出土しており、近世後期～近代の遺物が主体である。陶磁器の中で最も多くみられた沖縄産は碗、皿、鉢、擂鉢、瓶、急須、鍋、壺、甕、火炉等の多種多様な製品があり、本土産陶磁器は瀬戸・美濃産、関西系、常滑産、肥前産、薩摩産などの製品が得られている。瀬戸・美濃産の碗・皿類は、近現代の磁器が主体であり、それぞれ揃いの製品が多い。これらの製品には経済統制下に生産されたことを示す統制番号が記された製品はほとんどみられないという特徴がある。その他、特徴的な事項としては、先の報告で、那覇市湧田古窯跡を中心に焼成されたことが考えられる資料で、17 世紀前半に位置づけられる初期沖縄産無釉陶器がほとんどみられないことを触れたが、今調査では、Ⅶ～Ⅸ地区で確認され、中でもⅨ地区では 150 点ほど出土した。Ⅸ地区では古期の様相が窺える区画 33 があり、同区画内の遺構からも初期沖縄産無釉陶器が出土している。また、本土産陶磁器では、18 世紀第 2 四半期頃から出現し、18 世紀後半以降流行するとされる肥前産の蛇の目凹型高台皿がみられる他、19 世紀代と考えられる薩摩産の小碗等がみられる。中国産陶磁器では、17 世紀後半～ 18 世紀代の福建・広東系の碗もみられるが、主体は 18 世紀後半～ 19 世紀と考えられる徳化窯製品である。その他、注目される遺物に、第 92 図 2 の白磁の壺がある。いわゆる安平壺と称される 17 世紀代を中心とする中国産の壺で、首里城などで出土例がみられる。安平壺は普天間古集落遺跡で今回初めて出土した。中部地域の集落遺跡における出土事例は珍しく、今後、安平壺の出土地がどのような広がりをみせるのか興味深い。その他、Ⅶ地区 SK091（15-H13 グリッド）内から見つかった印部石（ハル石）が注目される。印部石は 1737 ～ 50 年に琉球王府が沖縄島と周辺離島（宮古・八重山諸島は除く）を検地した際、測量の図根点である「印部土手（しるびどて）」に建てられた石碑で、碑面には土手の所在する原名（はるなー）と順序を示す記号が彫られる。かつては 1 間切に 200 ～ 300 ほど設置されましたが、1899 ～ 1903 年の土地整理によりほとんどが消失している。この石碑は細粒砂岩（方言名ニービヌフニ）製で、碑面には「け　いしきや原」と彫られていることより、調査地の原名である「石川原（いしかわばる）」の印部石と考えられる。今回、見つかった印部石は廃棄土坑からの出土で原位置は不明であるが、近世の宜野湾間切を見守ってきた貴重な資料である。

まとめ

以上、平成 22 ～ 23 年度調査における成果を時代別に整理した。今回の調査によって、縄文時代、グスク時代、近世～近代の遺構及び遺物が確認された。縄文時代は縄文時代後期～晩期にかけての遺構や遺物が局地的に確認された。今回は竪穴遺構を確認することができなかったが、落とし穴状の遺

構の検出数がさらに増えた。今後はこれまで確認されている竪穴遺構や落とし穴状の遺構との位置関係や遺構出土の遺物との関係性を分析することで、本地域における縄文時代後期～晩期頃の様相について明らかにしていきたい。

グスク時代は 11 世紀中～ 13 世紀前半頃の母屋（主屋）と付随建物（高床倉庫）の建物配置を把握することができた。従来、吹出原遺跡やウガンヒラー北方遺跡など、沖縄本島中部西海岸地域でみられる 12 ～ 13 世紀頃の集落遺跡と共通する様相が本地域でも確認することができた。

近世～近代は普天間古集落遺跡に関する遺構が多く確認された他、地下壕や戦時中の避難に伴う遺構も見つかった。特に普天間古集落に関わる区画については、古期の様相を示す箇所がみられる等、普天間古集落遺跡における土地利用の変遷の一端を窺い知ることができた。

最後に、今回の報告では自然遺物については触れることができなかった。自然遺物を分析することで、近世～近代の動物利用（食糧や家畜の存在等）の様相を窺い知ることができ、当時の生業を復元する上でも重要となる。今後の課題としたい。

引用・参考文献

うるま市教育委員会 2014『平敷屋トウバル遺跡－ホワイトビーチ地区燃料施設建設工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－』うるま市文化財調査報告書第 22 集　うるま市教育委員会

うるま市教育委員会 2012『楚南村跡ほか－嘉手納地区（18 ～ 23）運動施設移設工事に係る文化財発掘調査－』うるま市文化財調査報告書第 17 集　うるま市教育委員会

沖縄県立埋蔵文化財センター 2015『キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書 1 －普天間古集落遺跡－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 74 集　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2015『キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書 2 －普天間古集落遺跡・普天間後原第二遺跡・普天間下原第二遺跡・普天間石川原遺跡－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 79 集　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2012『中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書 (3) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 63 集　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『中城御殿跡－県営首里城公園　中城御殿跡発掘調査報告書 (2) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 58 集　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2011『鏡水箕隅原 A 遺跡－那覇西道路建設に伴う発掘調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 57 集　沖縄県立埋蔵文化財センター

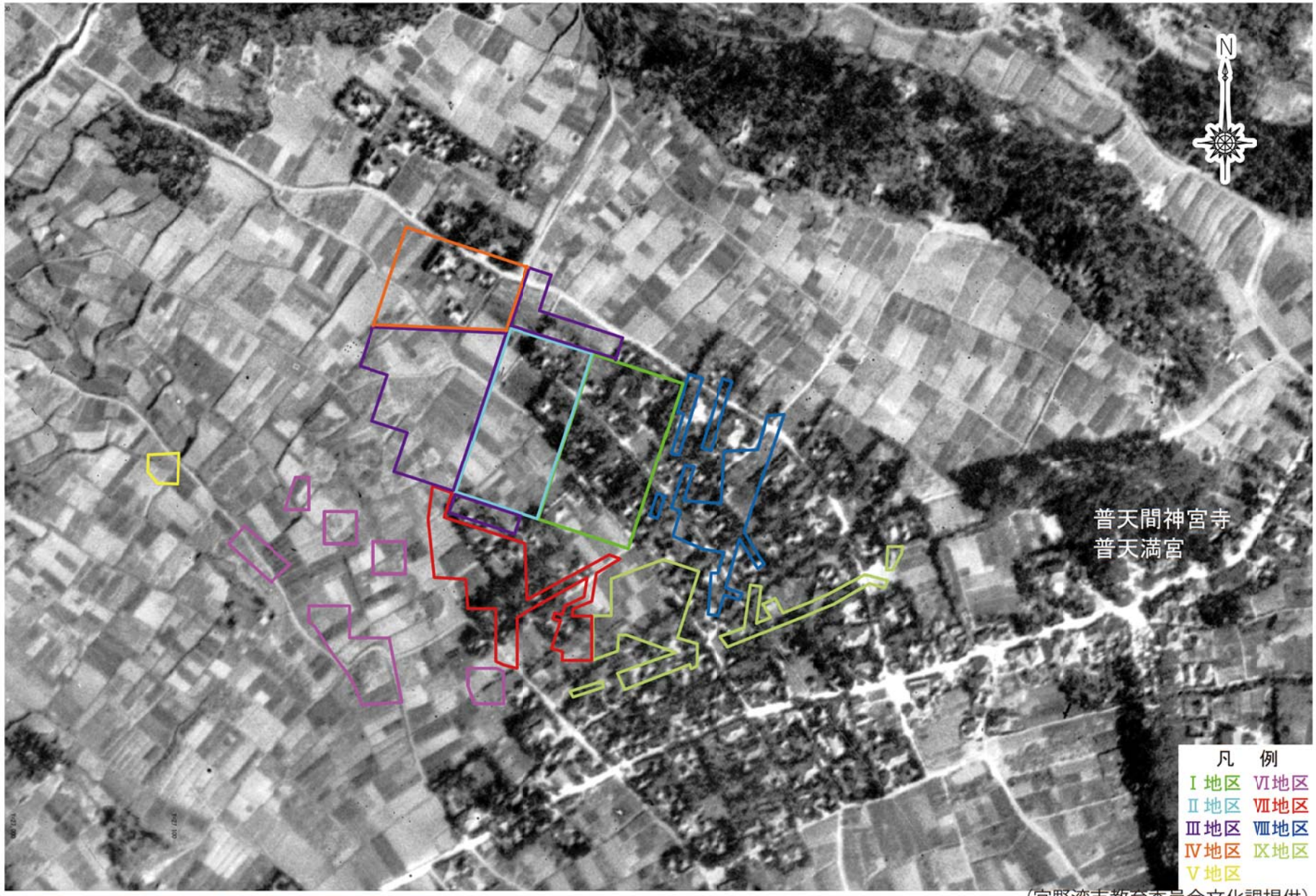
沖縄県立埋蔵文化財センター 2010『首里城跡－御内原北地区発掘調査報告書 (Ⅰ) －』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第 54 集　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2007『渡地村跡－臨港道路那覇 1 号線整備に伴う緊急発掘調査報告－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 46 集　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2006『西長浜原遺跡－範囲確認調査報告書－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 39 集　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県立埋蔵文化財センター 2006『新城下原第二遺跡－キャンプ瑞慶覧内整備工場建設に係る緊急発掘調査報告－』沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 35 集　沖縄県立埋蔵文化財センター

沖縄県教育委員会 1999『喜友名貝塚・喜友名グスクー宜野湾北中城線（伊佐～普天間）道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書（Ⅰ）ー』沖縄県文化財調査報告書　第 134 集　沖縄県教育委員会
沖縄県教育委員会 1995『湧田古窯跡（Ⅱ）ー県庁舎議会棟建設に係る発掘調査ー』沖縄県文化財調査報告書第 121 集　沖縄県教育委員会
沖縄県教育委員会 1993『湧田古窯跡（Ⅰ）ー県庁舎行政棟建設に係る発掘調査ー』沖縄県文化財調査報告書第 111 集　沖縄県教育委員会
沖縄県教育委員会 1989『宮城島遺跡分布調査報告書』沖縄県文化財調査報告書第 92 集　沖縄県教育委員会
沖縄県教育委員会 1985『シヌグ堂遺跡ー第 1・2・3 次発掘調査報告ー』沖縄県文化財調査報告書第 67 集　沖縄県教育委員会
沖縄市教育委員会 1997『室川貝塚ー沖縄市総合庁舎建設に伴う崖下地区記録保存発掘調査の報告書ー』沖縄市文化財調査報告書第 20 集　沖縄市教育委員会
宜野湾市教育委員会 2012『ぎのわんの地名ー内陸部編ー』市民民俗芸能調査報告書　宜野湾市教育委員会
宜野湾市教育委員会 2011『普天間フィールー丘陵古墓群ー平成 22 年度　キャンプ瑞慶覧内米海軍病院移設予定地区発掘調査報告書ー』宜野湾市文化財調査報告書第 48 集　宜野湾市教育委員会
宜野湾市教育委員会 2006『基地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 基地内遺跡ほか発掘調査事業ー普天間飛行場基地内ー野嵩タマタ原遺跡範囲確認調査・上原同原遺跡範囲確認調査・遺跡発掘事前総合調査』宜野湾市文化財調査報告書第 38 集　宜野湾市教育委員会
宜野湾市教育委員会 1991『ヌバタキー都市計画街路 2 ー 1 ー 1 号建設に係る緊急発掘調査報告ー』宜野湾市文化財調査報告書第 13 集　宜野湾市教育委員会
北谷町教育委員会 2012『小堀原遺跡ー桑江伊平土地区画整理事業に伴う発掘調査事業（平成 17 ～ 20 年度）ー』北谷町文化財調査報告書第 34 集　北谷町教育委員会
名護市教育員会 2007『屋部前田原貝塚』名護市文化財調査報告書 18　名護市教育委員会
読谷村教育委員会 2003『ウガンヒラー北方遺跡』読谷村教育委員会
上江洲均 1973『沖縄の民具』考古民俗叢書 12　慶友社
上地博 2002「縄文後期のステップ（階段）状の文様を有する土器について」『文化課紀要』第 18 号
沖縄タイムス社 1983『沖縄大百科事典　上巻』
沖縄県立博物館・那覇市立壺屋焼物博物館 2011『琉球陶器の来た道：沖縄県立博物館・美術館、那覇市立壺屋焼物博物館合同企画展　図録』
九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年ー九州近世陶磁学会 10 周年記念ー』九州近世陶磁学会
倉成多朗 2014『壺屋焼入門』　ボーダーインク社
仲宗根求 2003「読谷村発見のグスク時代の掘立柱建物跡について」『読谷村立歴史民俗資料館紀要』第 27 号　読谷村立歴史民俗資料館
早坂優子 2000『日本・中国の文様事典』視覚デザイン研究所編
宮城弘樹・具志堅亮 2007「中世並行期における南西諸島の在地土器の様相」『廣友会誌』第 3 号　廣友会



図版 52　昭和 20 年撮影航空写真調査箇所重ね図

（宜野湾市教育委員会文化課提供）

第 16 表　遺物出土状況

種類 ＼ 出土地		Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ 地 区														
		縄文遺構	グスク	包含層・Ⅲ層	区画 26	区画 27	区画 28	区画 29	区画 30	区画 31	区画 32	区画 33	区画 34	近世～近代の遺構	包含層・Ⅱ層	合計
中国産	青磁				2	1					1	1		18	8	31
	白磁		2		17	5	4	10		1	9	12	2	111	38	211
	白磁？				1											1
	染付		2		32	24	13	24	1	13	9	39	11	387	105	660
	青磁染付													1		1
	染付？														1	1
	色絵						1			1		2	1	6	2	13
	三彩													1		1
	瑠璃釉					1					1			4	2	8
	無釉陶器				2							1		2	8	13
	褐釉陶器		1		4	1	1	1		3		5		84	14	114
タイ産褐釉陶器			1			1					1	1		4	4	12
東南アジア産陶器								1								1
東南アジア産褐釉陶器														1		1
褐釉陶器														1		1
翡翠釉															1	1
本土産	染付				7	1	2	2		4		2	2	28	4	52
	色絵					1					1			1		3
	陶器				6	7	4	1	1	3	1	13	1	78	18	133
	近代陶器				4	19	8	7		2		4	3	37	23	107
	磁器				5	12	24	1		2		4	2	44	9	103
	近現代磁器				223	318	190	153	16	141	66	53	306	1538	499	3503
沖縄産施釉陶器					450	652	715	573	9	337	260	673	599	5185	1668	11121
沖縄産無釉陶器					396	422	383	633	17	319	169	541	320	4866	1136	9202
カムイヤキ			3		5	1	2				2	5	1	45	16	80
陶質土器					75	74	113	109	4	28	78	214	96	1136	270	2197
瓦質土器							3	2			1	5	1	13	5	30
土器		398	149	177	38	28	5	5		1	6	34	78	130	49	1098
産地不明					4	2		1						21	9	37
石器		15	5	2	6		2	2		1	8	7	6	41	8	103
石器？						3				1				7		11
石製品					5	2	4	4			1		2	49	6	73
石製品？					3		1							6	1	11
滑石製品														1		1
骨製品														3		3
木製品														2		2
貝									1							1
貝製品														3		3
円盤状製品						3	2	2		1		16	6	57	3	90
煙管					1	1	3					4		13	3	25
銭貨						1		2			1	1		13	2	20
コイン													2	5	3	10
青銅製品					3	4		2	1	2	3	1	2	49	4	71
鉄製品					9	23	7	14	4	10	6	13	9	163	70	328
金属製品						1		1		5				2		9
明朝系瓦					48	110	40	54	25	19	48	71	253	2525	396	3599
磚														1		1
煉瓦														4		4
玉製品														1		1
ガラス製品					5	13	4	5			1		7	49	4	88
プラスチック製品							3		1	1				13		18
万年筆							1									1
漆製品							1							1		2
漆片														1		1
漆喰														3	1	4
石材		86	9	22	10	8	5	3			10	23	12	145	41	374
石材？																0
碍子						4								4		8
焼土		153	16	74	8	8	11	8	5	8	6	63	11	514	121	1006
炭		4	2	2		3	3	1		1	15	9	6	114	7	167
木片		1		1		2	1							7	1	13
タイル						1				1				5	4	11
軽石														1		1
石けん箱									1							1
アルミ製品													1	2		3
ジェラルミン製品									1						1	2
ゴム製品														1		1
鉄滓														5		5
その他			3			2			1					19		25
不明						2	1	1			5	8	2	68	7	94
合計		657	193	278	1369	1761	1557	1632	88	905	709	1825	1742	17639	4572	34927

報告書抄録

ふりがな	きゃんぷずけらんないびょういんちくにかかるぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書 3
副 書 名	普天間古集落遺跡
巻　　次	—
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第83集
編 著 者 名	知念隆博、金城貴子、又吉幸嗣
編 集 機 関	沖縄県立埋蔵文化財センター
所 在 地	〒903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原193-7　　TEL　098-835-8752
発行年月日	平成28(2016)年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °　′　″	東経 °　′　″	調査期間	調査面積	調査原因
普天間古集落遺跡（やてんまこしゅうらくいせき）	沖縄県宜野湾（おきなわけんぎのわんし）市字普天間（あざふてんま）	472051	—	26° 17′ 37″	127° 46′ 26″	2012.08.30～ 2013.03.29 2013.08.01～ 2014.03.12	12,700㎡ Ⅶ地区：4,500㎡、Ⅷ地区：3,800㎡、Ⅸ地区：4,400㎡	記録保存調査

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
普天間古集落遺跡	集落	縄文時代 グスク時代 近世～近代	土坑 掘立柱建物跡、ピット 建物跡、土坑、方形石組遺構、溝、道、井戸、窯跡、炉跡、地下壕跡	土器、石器 土器、カムィヤキ、白磁、滑石製石鍋 中国産陶磁器、タイ産陶磁器、本土産陶磁器、沖縄産陶器、土器、石器、石製品、骨製品、貝製品、漆製品、円盤状製品、煙管、銭貨、青銅製品、鉄製品、瓦、塼、ガラス製品、石材、貝類・脊椎動物遺体	グスク時代の掘立柱建物跡が複数見つかり、建物配置を確認することができた。 近世～近代の遺構については、これまでの調査で確認された屋敷や畑等の区画に連結する、新たな区画を確認することができた。また、戦時中の地下壕跡も発見された。

要 約	米軍の病院建設に伴う記録保存調査を行った結果、縄文時代、グスク時代及び近世～近代の遺構や遺物を確認した。縄文時代の遺構には落とし穴の可能性が考えられる深い土坑、グスク時代の遺構には掘立柱建物跡やピットがみられた。近世～近代の遺構は最も多く、屋敷や畑等の区画を示す溝跡をはじめとして、建物跡、土坑、方形石組遺構、井戸、窯跡、炉跡、地下壕跡などの様々な遺構が見つかった。また、出土遺物は、沖縄産陶器を主体として、生活用品を中心に様々なものがみられた。今回の発掘調査によって、当時の生活の様相や、土地利用の実態等を考える上でも重要な成果が得られた。

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書　第 83 集

キャンプ瑞慶覧内病院地区に係る文化財発掘調査報告書 3

ー普天間古集落遺跡ー

発行年　平成 28（2016）年 3 月
発　行　沖縄県立埋蔵文化財センター
編　集　沖縄県立埋蔵文化財センター
〒 903-0125　沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7
TEL　098（835）8751・8752
印　刷　株式会社　沖産業
〒 901-2221　沖縄県宜野湾市伊佐 2-1-1
TEL　098（898）2191

© 沖縄県立埋蔵文化財センター　2016　Printed in Japan
許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる